

新型コロナを題材とした大学地理学授業の試み

三木 一彦*

Using COVID-19-related learning materials for University Geography Classes

Kazuhiko MIKI

要旨 新型コロナウイルス感染症の感染拡大は、2020～21年の世界に甚大な影響を及ぼしている。本稿では、筆者が文教大学で担当している授業のうち、新型コロナを題材としたものについて、その内容と受講生の反応を紹介し、新型コロナを大学の授業で地理学的に扱う意味を考察した。コロナに関する国別・都道府県別のデータや新聞記事・テレビ番組、さらに感染症の歴史やそれに関わる著作を取り上げた授業に対し、受講生の反応はおおむね良好で、それらの材料を通して自らの立ち位置を見つめ直すような意見や感想が多く寄せられた。空間的な俯瞰を主眼とする地理学的手法は、氾濫する情報の中、新型コロナをめぐる状況を自分なりに分析する上で有用であり、困難な状況におかれた学生たちの力にもなり得るであろう。

キーワード：新型コロナ 地理学 授業 大学

I. はじめに

2019年12月に始まった新型コロナウイルス感染症（COVID-19、本稿では新型コロナとする）の感染拡大は、2020～21年の世界に甚大な影響を及ぼし、国内外における各種の措置やワクチン接種等の対策にも関わらず、今なおその収束を見通せない状況にある（本稿の記述は2021年9月末時点）。日本の学校現場では、安倍首相（以下、役職名は当時）の突然の要請（2020年2月27日）（後掲表1）に始まる約3か月間の休校をはじめ、行事や課外活動の縮小ないし中止、日常の教育活動における感染対策の徹底など、日々対応に追われている。大学においても、その多くが2020年度春学期の授業を全面オンライン化し、その後も対面とオンラインを併用する状況が続いている。今や不可欠となったオンライン授業の方法に関する

議論は各方面でなされ¹⁾、現下の状況への対応策が練られているさなかにある。

その一方で、人類と感染症の長いつきあいを考えたとき、現在の状況に一喜一憂するだけでなく、時間的・空間的な俯瞰をふまえて現状を把握することも重要である。近年の歴史学では、マクニールやダイヤモンドの著書²⁾に代表されるように、感染症が人類史に与えた影響を長期的・広域的な視点でとらえようとする動きがある。また、それとは次元が異なるが、筆者の専門とする地理学や歴史地理学でも、江戸時代の天然痘・コレラの流行³⁾や八重山諸島のマラリア⁴⁾を対象とした研究例があり、今回の新型コロナに関する報告もみられる⁵⁾。

本稿では、筆者が2020～21年度に文教大学で実施した授業のうち、新型コロナや歴史上の感染症を題材として取り上げたものについて、その内容と受講生の反応を紹介し、新型コロナを大学の

* みき かずひこ 文教大学教育学部学校教育課程社会専修

授業で地理学的（または歴史地理学的）に扱う意味を考察する。なお、学生の反応については、本学で使用されている授業支援システム「manaba」上の記述や、提出されたレポートの抜粋を用いることとする⁶⁾。その報告に入る前に、次章では、世界と日本における新型コロナの感染状況について振り返っておきたい。

II. 新型コロナの感染状況

(1) 世界

表1にあるように、中国がWHO（世界保健機関）に新型コロナのクラスター発生を報告したのは2019年12月31日であるが、すでに同月1日には湖北省武漢に最初の感染者がいたとの論文があるという⁷⁾。その後の感染状況の推移を4週ごとに示したのが表2であり、日本・中国・韓国の東アジア3カ国と感染者数の上位10カ国、それに地域バランスなどを考慮してインドネシア・南アフリカ・イスラエル・オーストラリアの17カ国を取り上げた。表の内容は、対象国の人口、4週ごとの感染者数、その累計と感染率（人口10万人あたり）、死者数・死亡率（同上）・致死率（死者数／感染者数）、それにワクチン接種数・接種率である。

感染当初の中国とその直後の欧米諸国は、感染拡大に対してはほぼなす術がなかった。これについて、封鎖下の武漢で当局などによる妨害や攻撃に耐えて書き継がれたブログをまとめた方方の『武漢日記』は、「感染症発生初期の中国の怠慢と、感染症と闘った中国の経験を信じようとしないう西洋諸国側の傲慢さが、無数の庶民の命を奪うことになった」と述べている⁸⁾。新型コロナは、とりわけ伝播直後の西ヨーロッパ諸国で猛威をふるい、2020年3月にはヨーロッパの感染者数が世界の4分の3に迫る週もあった⁹⁾。イタリアのパオロ＝ジョルダノが著した『コロナの時代の僕ら』の言を借りれば、「今回の新型ウイルス流行は、この世界が今やどれほどグローバル化され、相互につながり、からみ合っているかのものさし」なのである¹⁰⁾。

その後、新型コロナは南北アメリカやインドをはじめ、世界各地に拡大していく。各国は難しい舵取りを迫られたが、アメリカのトランプ大統領、ブラジルのボルソナーロ大統領、ロシアのプーチン大統領、イギリスのジョンソン首相は、いずれも「反リベラル、ポピュリズム指導者」としてのコロナ軽視・経済優先が、感染の急拡大につながったとされる¹¹⁾。現在の累計感染者数を見ても、これら4国とインドが上位5カ国となっている。また、新型コロナの死亡リスクを上げる因子としては、高齢のほか、肥満や運動不足があげられている。つまり、「新型コロナは感染症でありながら、生活習慣病の要素を色濃く持つ」病気であり¹²⁾、このことが欧米やラテンアメリカ諸国の死亡率・致死率を押し上げる要因になっているとみられる（インドやトルコについてはその逆がいえよう）。

世界の感染者数・死者数は北半球が冬を迎えた2020年12月～2021年1月にピークを迎えた¹³⁾。その後、ワクチン接種が進行した欧米などでは感染者数がかなり抑え込まれた（例えば表2のイスラエル）一方、その遅れや変異株の発生によってインドやラテンアメリカなどで感染者が急増し、2021年4～5月に世界の感染者数はこれまでで最大のピークに達した。そして、6月以降、先進国の感染者数が再び増加に転じるとともに、イラン・インドネシアのように、中東や東南アジアで感染者数の最多を更新する国もあらわれている。表2をみると、インドネシアや南アフリカにおける致死率の高さやワクチン接種率の低さが目立っており、医療分野における「南北問題」の存在を物語っている。中長期的なコロナ対策を考えると、こうした途上国での感染抑制は世界的に取り組むべき必須の課題であろう。

(2) 日本

日本国内の感染状況をみるため、表3では、三大都市圏（首都圏の1都3県、関西圏の2府1県と愛知）、地方中枢都市圏のある北海道・宮城・

表1 新型コロナ関連の主なできごと

年 月	日付とできごと
2019. 12	1. 中国、武漢で最初の感染者発生。31. 中国、武漢当局がWHOに肺炎のクラスター発生を報告。
2020. 1	14. WHOが新型コロナウイルスの検出を認定。16. 日本国内で初の感染者確認（神奈川県）。23. 中国、武漢の都市封鎖（ロックダウン）開始（～4.8）。29. 武漢から日本人退避のための政府チャーター機第1便が到着（2.17までに計5便）。
2	5. クルーズ船「ダイヤモンド・プリンセス」号が横浜に入港（感染者712人、死者14人）。11. WHOが新型コロナウイルス感染症を「COVID-19」と名づける。13. 日本国内で初の感染者死亡（神奈川県）。27. 安倍首相が全国の学校に臨時休校を要請。28. 北海道の鈴木知事が道内に「緊急事態宣言」を发出。
3	5. 中国、習近平国家主席の来日延期。10. イタリア、全土で移動制限開始。11. WHOが新型コロナについて「パンデミック（世界的大流行）」と表明。13. 改正新型インフルエンザ等対策特別措置法（新型コロナ特措法）が成立；アメリカで国家非常事態宣言。17. フランス、全土で外出制限開始。22. アメリカ、ニューヨーク州で外出制限開始。24. 東京五輪・パラリンピックの1年程度延期を決定。27. イギリスのジョンソン首相が感染。29. 志村けんさんが新型コロナによる肺炎のため死去。
4	1. 安倍首相が布マスク配布を表明；全世界からの入国者に2週間の待機要請を決定。7. 緊急事態宣言を発令（東京・埼玉・千葉・神奈川県・大阪・兵庫・福岡）。12. アメリカの累計死者数が2万人を超え、イタリアを上回って世界最多に。16. 緊急事態宣言の範囲を全国に拡大。
5	1. 特別定額給付金（新型コロナウイルス感染症緊急経済対策関連）10万円給付の申請開始。25. 緊急事態宣言を全面解除。
6	13. 「夜の街」感染防止指針を策定。19. プロ野球が無観客で開幕。24. 政府の新型コロナウイルス専門家対策会議を「閣僚会議」下のコロナ対策分科会に改編。28. 世界の累計感染者数が1,000万人を超える。
7	2. 南アフリカで感染者が急増し、WHOが警戒を呼びかけ。6. ブラジルのボルソナロ大統領が感染。22. 「Go To トラベル」事業開始（東京を除く）。29. 日本の新規感染者数が初めて1,000人を超える；岩手で初の感染者確認。
8	28. 安倍首相が辞任を表明。
9	1. スペインで感染が急激に再拡大し、一部で移動規制。19. イベントの入場制限を緩和（上限5,000人→会場収容人数の50%）。29. 世界の累計死者数が100万人を超える。
10	1. 「Go To トラベル」事業に東京を追加；海外からの入国受け入れを一部再開；「Go To イート」事業のポイント付与開始。2. アメリカのトランプ大統領が感染。14. フランスが3か月ぶりに非常事態を宣言、ヨーロッパで感染が再拡大。20. 「Go To 商店街」事業のイベント開始。29. 日本での累計感染者数が10万人を超える。
11	8. アメリカの累計感染者数が1,000万人を超え、非常事態宣言を出す州も。
12	6. ロシアで国産ワクチンの大規模接種開始。8. イギリスでワクチン接種開始（ファイザーとビオンテックの共同開発）。9. ドイツで新規死者数が最多になり、メルケル首相が「厳しい措置必要」と演説。14. アメリカでワクチン接種開始（ファイザー製）。17. フランスのマクロン大統領が感染。21. 韓国でコロナの新規死者数・感染者数が最多に。25. 日本で初めて変異株感染を確認（イギリスからの到着者）。28. 「Go To トラベル」事業を一時停止。29. イギリスで変異ウイルスが拡大し、新規感染者数が5万人超。30. 中国が国産のワクチンを初の承認、国有製薬会社のシノファームが開発。
2021. 1	7. 緊急事態宣言を再発令（東京・埼玉・千葉・神奈川県）。8. 日本の新規感染者数が過去最多の7,882人。13. 緊急事態宣言に栃木・岐阜・愛知・京都・大阪・兵庫・福岡の7府県を追加。19. 日本の新規死者数が初めて100人を超える。27. 世界の累計感染者数が1億人を超える。
2	3. コロナ特別措置法（コロナ特措法）と感染症法の改正案が成立。14. コロナワクチンを日本国内で初承認（ファイザー製）。17. 医療従事者向けのワクチン接種を開始。
3	20. 東京五輪・パラリンピックの海外客受け入れ断念。21. 緊急事態宣言を全面解除。25. 東京五輪の聖火リレーがスタート（福島）。
4	4. フランスで変異ウイルスの拡大により、全土で3度目の外出制限。5. まん延防止等重点措置を宮城・大阪・兵庫の一部市町村に適用（その後、沖縄、埼玉・千葉・神奈川県、愛媛、北海道・岐阜・三重、群馬・石川・熊本を順次追加）。9. 日本での累計感染者数が50万人を超える。12. 高齢者対象のワクチン接種を開始。19. 世界の1週間あたり新規感染者数が過去最多の520万人超。25. 3度目の緊急事態宣言を発令（東京・京都・大阪・兵庫）。26. 日本での累計死者数が1万人を超える；インドで新規最多の35万人超の感染確認。
5	12. 緊急事態宣言に愛知・福岡を追加。16. 緊急事態宣言に北海道・岡山・広島を追加。23. 緊急事態宣言に沖縄を追加。24. 自衛隊によるワクチン大規模接種センターの接種開始（東京・大阪、モデルナ製）。
6	1. 東南アジアで感染拡大、マレーシアで2週間のロックダウン。15. アメリカ、ニューヨーク州のワクチン接種率が7割を超え、制限をほぼ解除。16. 島根で新型コロナによる初の死者。19. ブラジルの累計死者数が50万人を超え、大統領への抗議活動も。21. 3度目の緊急事態宣言を解除（沖縄を除く、まん延防止等重点措置に移行の都道府県も）；ワクチンの職域接種（企業・大学）開始（モデルナ製）；東京五輪の有観客開催決定。25. ワクチン職域接種の申請受け付けを一時休止。
7	8. 東京五輪を無観客開催に（東京・埼玉・千葉・神奈川県）。11. サッカーヨーロッパ選手権決勝を6万人超の有観客で開催（イギリス）。12. 緊急事態宣言に東京を追加（沖縄は延長）；まん延防止等重点措置は4府県で延長。19. 「抗体カクテル療法」用の治療薬を厚生労働省が承認。23. 東京五輪開会式（～8.8）。29. 日本での新規感染者数が初めて1万人を超える。
8	2. 緊急事態宣言に埼玉・千葉・神奈川県・大阪を追加（まん延防止等重点措置から移行）；まん延防止等重点措置を北海道・石川・京都・兵庫・福岡に適用（その後、福島・茨城・栃木・群馬・静岡・愛知・滋賀・熊本、宮城・山梨・富山・岐阜・三重・岡山・広島・香川・愛媛・鹿児島、高知・佐賀・長崎・宮崎を追加）。5. 世界の累計感染者数が2億人を超える。7. 日本での累計感染者数が100万人を超える。16. 東京パラリンピックの原則無観客開催を決定（学校連携観戦を除く）。20. 緊急事態宣言に茨城・栃木・群馬・静岡・京都・兵庫・福岡を追加。23. アストラゼネカ製のワクチンを国内初接種（大阪）。24. 東京パラリンピック開会式（～9.5）。27. 緊急事態宣言に北海道・宮城・岐阜・愛知・三重・滋賀・岡山・広島を追加。
9	3. 菅首相が退陣を表明。
10	1. 緊急事態宣言・まん延防止等重点措置を全国で解除。

注) 太字は日付（；は同日のできごと）。「新規」は1日あたり。

(おもに以下のホームページにより作成)

①NHK (<https://www3.nhk.or.jp/news/special/coronavirus/chronology/?mode=all&target>)

②中国新聞 (https://www.chugoku-np.co.jp/local/news/article.php?comment_id=715447&comment_sub_id=0category_id=1167)

表2 新型コロナウイルス感染者数の推移（4週ごと）【世界】

人口(千人)	24.日本	107.中国	76.韓国	1.アメリカ	2.インド	3.ブラジル	4.イギリス	5.ロシア	6.トルコ	7.フランス	8.イラン	9.ドイツ	10.スペイン	14.インドネシア	17.南アフリカ	34.イスラエル	127.オーストラリア	世界計	(世界死者)
19/12/30-20/01/26	126.476	1,439,324	51,269	331,003	1,380,004	212,559	67,886	145,934	84,339	65,274	83,993	45,196	46,755	273,324	59,309	8,656	25,500	7,794,799	-
20/01/27-20/02/23	3	1,985	553	3	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	4	2,062	56
20/02/24-20/03/22	129	75,057	8,341	21,300	334	904	7,741	304	947	14,280	21,591	158	37,795	514	0	0	18	76,891	2,406
20/03/23-20/04/19	9,315	2,703	1,764	673,156	15,371	32,778	108,677	42,547	81,382	96,429	59,230	2,626	165,435	6,061	2,794	12,553	5,505	1,939,989	149,888
20/04/20-20/05/17	5,924	283	389	741,934	75,215	184,541	109,308	238,899	65,738	30,573	37,324	4,695	35,689	10,939	11,321	2,999	450	2,288,513	156,086
20/05/18-20/06/14	1,144	245	1,034	604,312	229,995	610,587	440,336	247,212	28,610	12,429	66,563	21,285	13,532	20,763	51,381	2,475	266	3,137,715	130,697
20/06/15-20/07/12	4,073	793	1,333	1,157,745	528,631	972,017	20,707	198,198	35,304	9,958	70,162	65,296	11,123	37,422	198,448	19,117	2,251	4,922,977	143,542
20/07/13-20/08/09	25,281	3,627	1,181	1,722,886	1,303,457	1,161,615	20,868	160,374	108,401	30,526	69,575	141,617	68,066	49,697	289,004	44,388	11,145	6,991,103	169,253
20/08/10-20/09/06	24,636	1,368	6,579	1,256,196	1,960,801	1,130,390	39,165	137,969	227,046	142,962	59,974	226,205	210,920	68,713	83,696	46,740	5,509	7,565,976	165,399
20/09/07-20/10/04	13,920	604	2,914	1,115,707	2,435,562	787,691	165,490	189,496	233,226	294,789	83,453	317,807	293,592	109,389	42,832	135,787	914	8,297,900	158,593
20/10/05-20/11/01	15,807	800	2,544	1,725,410	1,634,709	636,135	530,394	421,780	240,793	950,089	144,653	377,490	434,878	109,286	45,736	49,571	469	11,636,658	167,215
20/11/02-20/11/29	43,507	1,408	7,126	4,135,682	1,208,837	721,692	576,984	632,535	349,701	591,482	323,027	252,098	402,860	121,482	59,687	20,570	295	15,968,410	261,363
20/11/30-20/12/27	72,659	2,995	23,094	5,639,212	794,931	1,210,210	694,006	780,932	762,225	336,095	259,164	167,277	231,760	179,099	209,772	64,435	411	17,299,798	310,239
20/12/28-21/01/24	143,349	3,607	18,222	5,949,787	466,683	1,305,360	1,333,620	669,152	290,955	471,670	172,069	277,276	706,312	275,897	409,928	195,485	465	18,283,102	367,582
21/01/25-21/02/21	63,846	1,738	11,908	3,079,877	337,118	1,327,756	463,365	445,326	207,548	488,255	199,049	200,851	490,954	289,391	97,528	153,543	159	12,193,029	350,006
21/02/22-21/03/21	31,131	854	11,665	1,643,269	607,479	1,789,714	173,156	292,143	360,818	606,561	227,724	180,232	139,649	181,331	34,434	79,117	272	11,672,625	254,713
21/03/22-21/04/18	74,191	750	15,464	1,808,806	3,188,979	1,961,065	96,415	245,232	1,219,951	864,961	421,640	423,715	199,857	144,164	28,879	9,437	313	17,675,875	311,214
21/04/19-21/05/16	148,159	918	17,547	1,299,126	9,895,968	1,687,070	62,042	238,144	894,217	473,765	524,430	610,838	192,436	135,402	45,463	1,926	462	21,699,947	369,942
21/05/17-21/06/13	95,834	11,912	16,213	546,119	4,755,912	1,776,593	110,514	268,442	218,573	218,156	280,647	823,624	117,402	171,008	128,282	520	270	13,471,474	314,956
21/06/14-21/07/11	44,868	3,159	20,172	386,099	1,397,233	1,724,381	531,399	574,646	150,859	61,674	335,264	539,788	242,182	615,845	439,872	6,185	780	10,962,824	234,348
21/07/12-21/08/08	198,091	2,288	42,910	1,994,539	1,097,233	1,088,247	952,359	564,849	582,822	486,062	984,427	196,968	256,954	462,989	290,526	215,946	23,884	17,999,865	258,204
21/08/09-21/09/05	540,217	1,649	49,447	4,139,481	1,054,218	747,314	893,359	522,949	675,407	171,917	483,503	55,342	65,345	87,708	88,658	169,144	45,201	14,289,506	272,267
21/09/06-21/10/03	144,311	1,474	53,370	3,327,196	778,034	543,486	865,425	522,949	675,407	171,917	483,503	55,342	65,345	87,708	88,658	169,144	45,201	14,289,506	236,805
累計	1,701,309	124,673	313,773	42,967,938	33,766,707	21,399,546	7,807,040	7,535,548	7,154,070	6,799,222	5,587,040	5,255,261	4,961,129	4,216,728	2,902,672	1,283,027	105,123	234,551,981	-
人口あたり	1,345	9	612	12,981	2,447	10,068	11,500	5,164	8,483	10,416	6,652	11,628	10,611	1,542	4,894	14,822	412	3,009	-
(死者数)	17,716	5,692	2,507	695,238	448,817	597,723	136,910	209,918	64,467	114,519	120,880	115,239	86,463	142,173	87,753	7,812	1,321	-	4,796,171
(人口あたり)	14.0	0.4	4.9	210.0	32.5	281.2	201.7	143.8	76.4	175.4	143.9	255.0	184.9	52.0	148.0	90.2	5.2	-	61.5
(感染あたり)	0.010	0.046	0.008	0.016	0.013	0.028	0.018	0.028	0.009	0.017	0.022	0.022	0.017	0.034	0.030	0.006	0.013	-	0.020
[ワクチン数]	159,494,782	2,203,600,552	39,852,412	389,142,237	870,708,636	225,795,545	93,507,378	90,015,787	110,159,938	94,771,408	51,990,783	52,083,872	70,153,507	139,232,210	17,815,485	15,247,269	26,441,588	6,188,903,420	-
[接種率]	126.1%	153.1%	116.7%	117.6%	63.1%	106.2%	137.7%	61.7%	130.6%	145.2%	61.9%	115.2%	150.0%	50.9%	30.0%	176.1%	103.7%	79.4%	-

注) 21/10/05閲覧 (ワクチン接種数の集計日は国によって差異がある)。国名の数字は感染者数の世界順位。「人口あたり」は10万人あたり、人口は『世界国勢図会』(WHOホームページ (https://covid19.who.int/)) により作成。

広島・福岡，それに秋田（「地方」の代表）・茨城（北関東の事例）・長野（平均的な感染者数）・沖縄（厳しい感染状況）の16都道府県を取り上げ，表2と同様に4週ごとの感染者数の推移その他のデータ（人口密度を加えた）を示した。

日本では，本稿執筆時点までにコロナ感染者数の「波」を5回数えている。このうち最初の第1波（2020年3～5月）に関しては，緊急事態宣言発令の遅れ（表1参照）があったとはいえ，諸外国（とくに欧米）と比べた場合（表2参照），相対的に押さえ込みに成功したといえよう。これについて「日本モデル」を賞賛する向きもあったが，具体的には要請レベルの「自粛」に人々が従ったこと，三密・クラスター対策の奏功，そして医療従事者・保健所職員・介護施設関係者などの献身が大きな理由とみられている¹⁴⁾。

ところが，緊急事態宣言を当初の予定よりも早く解除し，「Go To」事業などによる経済回復を急いだ¹⁵⁾結果，7～8月にかけて第2波を迎えることになる（同じような動きは表2の欧米諸国でも確認できる）。とりわけ南北に長い日本列島では，夏は暑さの厳しい地方で冷房使用による密閉状態が生じやすいことから，関東以西の都府県の感染者数が多かった。逆に次の第3波では，北から感染者の増加傾向があらわれ始め，年末年始を経て緊急事態宣言の再発令となった。2021年に入るとワクチン接種が開始されたが，欧米に比べるとその進行が緩慢だったこともあり，第4波・第5波と続けざまに見舞われている。この間，当初の予定から1年延期された東京五輪・パラリンピックの開催や観客をめぐる判断が，表1のごとく政府の新型コロナ対応に有形無形の影響を与え，世論の分断をまねいたほか，人々の行動・心理にも作用を及ぼしたとみられる。アクセルとブレーキを同時に踏むような政府のコロナ対応は，結果責任ではあるが，2人の首相の退任にもつながった¹⁶⁾。

表3をみると，各都道府県の感染者数・死者数は，おおむねそれぞれの人口および人口密度と相

関関係にある。感染率でみると，第4波時の緊急事態宣言が第5波まで続いた沖縄が突出して高く，表2の世界平均を上回る数値である。死亡率および致死率は，北海道と大阪・兵庫で高くなっているが¹⁷⁾，第5波における感染者数の急増によって致死率の数字自体は下がってきている。また，ワクチン接種は，大規模接種センター設置などの努力にも関わらず，三大都市圏で遅れ気味である。

Ⅲ. 2020年度

(1) 春学期「人文地理学」

教育学部社会専修2年生（一部に再履修者を含む。以下の授業でも同様）を対象とする本授業については，同年度春学期の授業開始が繰り下げになった期間を利用し，「カミュ『ペスト』¹⁸⁾を読んだ上で，現在の状況と照らし合わせつつ，その内容について自分なりに考察する（400字詰め原稿用紙3枚以上）」という読書レポートを課した（5月8日メ切，提出者57名）。表4にその内容の抜粋を示したが，4-1（表4の1.の意，以下同様に表記）のように人間の不変性に注目したものや，「自分のうちのペスト」といった言葉を今日のコロナ差別などの問題と結びつけたもの（4-2～4），さらに終わった後こそが大切という教訓を読みとったもの（4-5～7）など，コロナ禍における社会状況と作品中の描写を結びつけた感想が多かった。また，4-8・9のごとく，教育学部生らしい抱負の表明もみられた。

これをうけ，同授業の最終回（8月11日）では，感染症の歴史や同書について説明する講義をZoomによるリアルタイム形式で実施した。講義では，まず高校世界史の参考書¹⁹⁾を用いて感染症の歴史を概観²⁰⁾した後，1664～65年のロンドンにおけるペスト流行を題材としたデフォー『ペスト』²¹⁾の内容を取り上げた。とくにそこでは，市民たちが「売卜者や陰陽師や星占いのところに押しかけて行って，自分の運命を知ろうとしていた」，「いかさま医者や香具師や怪しげな薬を売っている老婆の後を追っかけ廻して，いろいろな

表3 新型コロナウイルス感染者数の推移（4週ごと）【日本】

人口(千人)	9.北海道	17.宮城県	45.秋田県	13.茨城県	4.埼玉県	6.千葉県	1.東京都	3.神奈川県	26.長野県	5.愛知県	11.京都府	2.大阪府	7.兵庫県	14.広島県	8.福岡県	10.沖縄県	全国	(全国死者)	
人口密度	66.9	316.7	83.0	469.1	1,985.3	1,213.6	6,344.7	6,344.7	3,806.8	151.1	1,459.9	5,600	4,623.6	6,507	3,307	1,023.5	637.1	338.3	-
19/12/30~20/01/26	0	0	0	0	0	0	2	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	4	0
20/01/27~20/02/23	26	0	0	0	1	10	27	15	0	16	2	1	0	0	0	2	3	143	1
20/02/24~20/03/22	136	1	2	4	50	34	110	61	4	126	23	130	111	3	3	0	0	955	40
20/03/23~20/04/19	272	82	14	135	613	641	3,023	704	48	266	234	1,080	402	129	514	112	112	9,784	197
20/04/20~20/05/17	580	5	0	29	321	203	1,935	485	24	100	99	559	186	34	139	27	27	5,484	518
20/05/18~20/06/14	156	0	0	0	33	44	196	335	2	15	87	240	38	11	97	6	6	4,467	52
20/06/15~20/07/12	124	18	0	31	441	196	2,388	442	0	10	2	17	0	2	167	0	0	1,148	175
20/07/13~20/08/09	258	76	19	198	1,416	1,038	7,937	1,524	53	2,660	536	3,741	899	229	2,088	974	26,962	66	
20/08/10~20/09/06	276	60	15	186	1,243	1,047	5,905	2,163	26	740	212	1,766	443	144	1,804	1,084	23,114	320	
20/09/07~20/10/04	353	186	8	93	679	835	4,705	1,706	30	838	274	2,067	468	59	175	381	13,825	231	
20/10/05~20/11/01	1,024	314	5	94	1,088	1,011	4,724	1,640	360	3,675	602	7,133	2,302	184	568	773	16,208	176	
20/11/02~20/11/29	5,512	459	27	768	2,472	1,881	9,433	3,696	423	5,668	1,792	8,955	3,754	2,164	2,492	910	45,452	350	
20/11/30~20/12/27	4,240	863	35	769	4,878	3,277	16,007	7,043	10,588	7,179	3,304	12,526	6,061	1,613	6,765	1,815	73,935	1,148	
20/12/28~21/01/24	3,711	1,200	122	2,055	10,104	10,088	38,080	18,512	10,558	7,179	3,304	12,526	6,061	1,613	6,765	1,815	145,141	1,846	
21/01/25~21/02/21	2,146	299	22	1,219	5,312	5,349	15,016	6,059	174	2,735	1,258	5,126	2,424	377	2,763	1,068	59,086	2,373	
21/02/22~21/03/21	1,557	1,162	8	818	3,010	3,066	7,783	3,000	174	1,147	252	2,542	1,099	87	931	668	31,233	1,344	
21/03/22~21/04/18	2,010	2,857	90	1,033	3,788	2,888	12,566	3,794	973	3,482	1,653	18,810	6,823	348	1,490	2,721	78,014	812	
21/04/19~21/05/16	8,021	971	321	1,582	6,102	3,879	22,156	6,992	846	10,544	3,751	26,794	11,806	2,955	9,994	2,356	149,750	1,875	
21/05/17~21/06/13	10,070	476	75	1,121	3,485	2,916	14,130	6,323	583	9,110	1,671	7,012	2,970	2,843	4,734	5,634	90,427	2,552	
21/06/14~21/07/11	1,356	290	176	702	2,889	3,642	15,269	6,122	126	1,814	467	3,074	785	342	962	1,862	45,419	881	
21/07/12~21/08/08	4,937	1,240	148	3,507	18,164	14,365	67,647	26,437	628	4,995	3,434	17,610	5,923	1,264	8,492	7,392	211,615	328	
21/08/09~21/09/05	11,400	4,732	600	7,502	40,091	36,146	107,310	59,414	2,468	35,494	12,040	58,244	22,522	6,960	24,410	16,466	542,248	1,074	
21/09/06~21/10/03	2,139	930	193	2,350	8,715	7,201	19,378	11,709	603	13,606	3,282	19,412	7,826	1,914	5,204	4,547	130,431	1,377	
累計	60,304	16,221	1,880	24,196	114,895	99,741	375,973	167,875	8,759	105,790	35,567	200,114	77,560	21,713	74,036	49,728	1,704,845	-	
人口あたり	1,149	703	195	846	1,563	1,594	2,701	1,825	427	1,401	1,377	2,272	1,419	774	1,451	3,422	1,351	-	
(死者数)	1,467	117	26	216	1,008	1,001	2,954	1,269	96	1,138	279	2,974	1,388	197	612	317	-	17,736	
(人口あたり)	27.9	5.1	2.7	7.6	13.7	16.0	21.2	13.8	4.7	15.1	10.8	33.8	25.4	7.0	12.0	21.8	-	14.1	
(感染者あたり)	0.024	0.007	0.014	0.009	0.009	0.010	0.008	0.008	0.011	0.011	0.008	0.015	0.018	0.009	0.008	0.006	-	0.010	
[ワクチン数]	6,235,998	2,859,368	1,281,690	3,658,697	8,467,981	7,551,275	17,409,688	11,081,059	2,531,823	8,963,175	2,981,334	10,198,135	6,801,609	3,565,325	6,508,181	1,630,138	161,749,571	-	
[接種率]	118.8%	124.0%	132.7%	127.9%	115.2%	120.6%	125.1%	120.5%	123.6%	118.7%	115.4%	115.8%	124.4%	127.2%	127.5%	112.2%	128.2%	-	

注) 21/10/04閲覧(ワクチン接種の集計日は国が09/30, 都道府県が09/26, いずれも職域接種分含まず)。都道府県名の数字は感染者数の全国順位。「人口あたり」は10万人あたり。

(NHKホームページ (https://www3.nhk.or.jp/news/special/coronavirus/) により作成。人口は『日本国勢図会』による2019年のデータ)

表4 2020年度「人文地理学」読書レポート（カミュ『ペスト』）

1.	私は以前、日本赤十字社が4月21日に公表した、「ウイルスの次にやってくるもの」という動画を見た。その内容からはウイルスには病気、不安、差別の三つの側面があるということ、そして今後は不安や差別といった側面が目立つようになる、ということが分かる。まさにそれは当書で語られた、「誰もが自分のうちに持っているペスト」のようなものではないだろうか。外国にいるアジア系の人がそこで差別的な扱いを受けたことや、トランプ大統領の中国を非難するような発言などを始め、誰が、何が悪いのかをウイルス以外に見出そうとして責め合い、より大きな問題となる可能性も考えられると思う。（3）
2.	極限状態の中で人はどう生きるべきなのかということを考えてきた。それは、自分の生活を守りつつ周りの人の生活も守れるような生き方をすればよいのではないかと考えた。特別なことはしなくていい。いつもより少し緊張の糸を張るだけで良いのではないだろうか。人が心の中に持っているペストはそれだけで少しおさまる可能性があるのかもしれないからだ。そして新型コロナウイルスに直面する人々は、自分だけがと考えると周りにいる人のことを考え、無責任な行動をとらないことが収束への近道ではないだろうか。（2）
3.	カミュはこの本のなかで「問題なのは、自分たちが果たしてペストの中にいるか否か、それに対して戦うべきか否か、ということであった」と記述している。もちろん、ペストに立ち向かう人もいれば、立ち向かわない人もいる。それは現在の日本、または世界においても同じであるだろう。しかし作品中の多くの人々は投げやりにならず、自分ができることを行っている。その姿は、困難な状況にあったときに、人々のあるべき姿として学ぶことがあると、カミュは伝えたかったのではないかと。そして、この『ペスト』という本はまるで現在を見つめているかのように感じた。しかし、カミュは現代を見つめているのではなく、人間というものがずっと変わっていないことを示していたのではないかと考えた。（2）
4.	大きな不条理を体験している今だからこそ、私たちは普段から起きている問題に目を向ける必要があると考える。そして、コロナウイルス収束後はさらに小さな問題に目を向ける。このような形をとることで、今まで表面化してこなかった問題に気がつき対処できるようになる。ウイルス収束後はオリンピックが控えていることもあり、多くの人が浮足立つだろう。しかし、それによって隠されてしまう問題があってはならない。そのためにも私たちは先に挙げた考え方を持つ必要があると考える。（2）
5.	現在のコロナもいつかは終息を迎える時は来るだろう。だが、疫病を封じこめ勝利したと一喜一憂している時間などない。この疫病が残した記憶・痕跡を教訓として糧とすることが、この疫病による犠牲者たちの命の意味を体系化することになるだろう。この教訓は疫病だけでなく、地震や台風などの天災といった未来の不条理に対しても同等に役立つべきだ。この「ペスト」は、真の敵・見えざる敵にどのように太刀打ちするか、今後その使命が私たちにあることを強く訴えかける作品だ。（2）
6.	ペストは最終的には収束を迎え、人々は喜びに満ち溢れる。しかし、ペストはいずれまたやってくるというリウー「本作の主人公の医師で、記録者とされる」は述べる。散々苦しい思いをしてもしばらく時間が経つことでその思いや体験したことの記憶が薄れ、再び感染症に限らず同じようなことを不用意に迎え繰り返し災難を起こしてしまうことを示しているのではないだろうか。我々が本当に大切にしていかなければならないのは、この事態が終わってからのことであるのだと考えた。（2）
7.	最後の最後に気を引き締めさせられる文言があった。それは「ペスト菌は今もどこかに潜んでいる。」というものだ。私は以前ネット上で「ウイルスと感染症は終息するものではなく収束するもの。対抗策を見つけ共存していくもの。」という言葉を見たことがあり、本著を読んだことでその意識がより強くなった。今回の読書レポートを通して私のみではなく多くの者が感じていることだと思うが、同じ過ちを人類は繰り返しているのである。そのため、巻末部からは過去の教訓を活かしてほしいと訴える筆者のメッセージを感じた。（3）
8.	この本を通して、そして、この本を通して見た現実から学んだことは数え切れない。今回の流行を単なる歴史上の出来事として扱うのではなく、後世に伝えるべきだろう。ペストの作者であるカミュがこの本を通して伝えたかったことの多くは伝わっていなかったといえるだろう。だからこそ、我々が伝えるべきである。映像やインターネットが発達した現代だからこそ、伝えられることは数え切れない。教員になることを志している我々だからこそ伝えられることもある。だからこそ、私はその自覚をもって行動する責任があると感じている。（2）
9.	リウーがこうしてペストのことを沢山の人間に本を通して伝えたように、コロナが感染した時のことを、今後を生きる人々に伝えていく必要がある。私は、この長い戦いが終わり自分が教師になった時に、子供たちに自分たちがなぜ学校を休まねばならなかったのか、事前にどうしておく必要があるのかなどを考える機会を設けたい。（3）

注)文末 () 内の番号は履修時の学年, [] 内は筆者による注記 (以下の表でも同様).

(読書レポートより抜粋)

薬品を手に入れようとした」という「ペスト禍」の人心のさまを、挿絵も含めて提示した。次に、「この記録の主題をなす奇異な事件は、194*年、オランに起った」という書き出しに始まるカミュの『ペスト』に関し、当時フランス領アルジェリアの要港であったオランの自然²²⁾・歴史などの沿革を説明した²³⁾。また、同書の内容や作者カミュの略歴²⁴⁾、今日における同書の意味を取り上げた新聞記事²⁵⁾を紹介し、同書がアラビア系住民の姿を捨象した「植民者文学」でもあるという筆者の考えも述べた。

春学期「人文地理学」全体の感想のうち、『ペスト』やコロナ禍についてふれたものを表5に取り上げた。この中では、読書離れが叫ばれる昨今、たとえ課題としてでも『ペスト』を読んだことが身になったという意見(5-1~3)や、コロナ禍だからこそ最終回はとくに積極的に取り組めたという見解(5-4)が示された。同書の読書レポート自体はとくに地理学分野に限った課題ではないが、読後に作品の地理的・歴史的背景を説明したことで、舞台となった地域やその歴史に対する理解が深められたといえるだろう。

(2) 秋学期「地誌学」

2020年度の新入生は、入学式もないままに当初からオンライン授業となり、大学における人間関係づくりなどの面で最も不利益をこうむってきた学年といえる。社会専修1年生対象の本授業の最終回(2021年1月22日)では、まず事前に「コロナ禍で個人的に思ったこと」をmanabaアンケートに記入してもらった(表6)。彼らをおそったコロ

ナ禍に対して否定的・悲観的な言辞が並ぶという筆者の予想に相違して、コロナ禍によって気づけたものの価値を大切にしていきたい(6-1~3)といった積極的な回答が目立った。また、社会のオンライン化(6-4)をはじめとする歴史の転換点にあるという意識(6-5)や、メディアリテラシー(6-6)、世界各国の指導者(6-7)への着目など、新型コロナの感染拡大が社会への目を見開くきっかけになったという記述もあった。なお、本アンケートについては、個人が特定されない形で全員(提出者41名)分の回答を授業資料として配布した²⁶⁾。

この最終回では、「コロナからみる世界」と題し、新聞記事を表7の通り準備した。そこでは、日本および世界各地の地誌を概観するという同授業の趣旨をふまえ、コロナをめぐる世界各地の状況やその対策(7-1~11)、さらには日本と世界のつながり(7-12)を取り上げた記事を選んだ。これら12本の記事を3~5名ずつのグループに割り振り(manabaのプロジェクト機能を利用)、授業に先立って担当の記事に関する考察を400~500字程度で記述してもらった。その後、グループ内で互いにmanaba上でコメントを記入し合い、当日の授業(対面。ただし一部受講生にはZoomで中継し、ブレイクアウトセッションも利用)ではグループごとに発表する形をとった。その最後にまとめとして、コロナ前にすでに存在していた諸問題が新型コロナによって顕在化した場合が多いとみられることを指摘し、感染症の歴史を振り返った上で、「大きな困難は変革の原動力に、より良い社会への力になる。そうしてい

表5 2020年度「人文地理学」の感想(「感染症の歴史と『ペスト』」)

1.	学期初めのカミュ「ペスト」のレポートは今の時代に適した題材で様々な価値観を得ることができました。(3)
2.	「ペスト」という本を、課題として出されていなかったら、自分から手に取って読むことはなかったと思います。ペストを通して、オランで流行したペストというものがあつたこと、そしてコロナウイルスが流行している今、自分はどうか行動すればよいのか考えるきっかけにもなりました。(3)
3.	一番最初に出された課題として読んだ「ペスト」は良くも悪くもこれからのコロナ禍中にある日本での過ごし方について考えさせてもらい、とても読んでよかったと思う一冊になりました。(2)
4.	コロナウイルスで、悩まされている今だからこそ、最後の13回目の授業[8/11の回]は、特に興味を持って、集中して取り組むことができたと思う。(2)

(manabaアンケートの回答より抜粋)

新型コロナを題材とした大学地理学授業の試み

表6 2020年度「地誌学」事前アンケート（コロナ禍の感想）

1.	<p>コロナ禍で様々な影響が世界に生じていますが、個人的にはコロナ禍という状況の中で得ることもあったと感じました。例えば、大学に行っていない間の多くの時間は自分の好きなようにデザインができます。私は塾で講師のアルバイトをしていて、中学三年生で受験を控える子のサポートという面でいえば、時間をそのために使うことができるので、コロナ禍でなかった場合に比べればかなり良いサポートはできていると思います。自由な時間が多く与えられる中でこの状況下でできることをするという点では自分の時間の使い方が最も試された期間だと感じました。また、自分の中の衛生的な意識も向上しました。これはほとんどの人に共通することだと思います。それに加えて、私は今地誌学の授業に行けるだけでも学校に行けることがうれしいです。おそらく、コロナがなかった場合私は今頃大学に行くことがめんどくさく感じることもあったと思います。しかし、コロナ禍によって本来の学生生活が奪われたことでコロナ禍が過ぎた後の時間をより大切に生きることができると感じます。今の気持ちを忘れたくないです。（1）</p>
2.	<p>コロナ禍で外出等の移動が制限され、改めて自分が周りの人に支えられて生きていたことを実感しました。例えば、母に代わって毎日の夕食を作るようになって初めて、毎日の献立を考える大変さや食材の使い方に頭を使うことに気づき、毎日当たり前のように夕食を作ってくれていた母に対し申し訳ない気持ちと感謝の気持ちを伝えました。また、友人に思うように会えなくなったり、一日中家に籠もって誰とも話さないような日が数日続いたりしただけでも気持ちが塞ぎ込んでしまい、生きていく上で人と話すことの大切さを痛感し、時々友人に会う機会があれば、より密度の濃い時間を過ごそうと思うようになりました。これらのことは普通に暮らしていればなかなか気づく機会も多くはなく、コロナ禍だからこそ気づけたことだと思っています。コロナは一刻も早く収まって欲しいと思いますが、コロナ禍で気づけたこれらのことはずっと忘れずにいようと思います。（1）</p>
3.	<p>私がこのコロナ禍で感じたことは、今まで当たり前だと思っていた日常は、決して当たり前ではなかったということです。私は今まで比較的平和な世の中で生きてきたので、家族に会えて、友達に会えて、学校に行けて、距離とか密だとか考えないで生活できている日常を、いつの間にか当たり前だと思っていました。去年の今頃は、この苦しい時期を乗り越えさえすれば、大学の入学式があり、授業のために大学に通い、部活も頑張る、様々な行事を楽しんで、たまには栃木に帰省して、といった大学生活が待っていると思っていました。今となっては考えて見れば、それは夢のような話でした。私が当たり前だと思っていた当たり前は、決して当たり前ではありませんでした。私はこのコロナ禍を通じて、当たりの日常のありがたみを学びました。今の世の中は何が起こるか分かりません。今あるこの日常も、いつなくなってしまうか分かりません。大切な人にも、いつ会えなくなってしまうかは分かりません。コロナは憎んでも憎みきれませんが、当たりの日常の大切さや、家族や友人の大切さを考え直すいい機会にもなると私は感じました。コロナ禍で当たり前が当たり前でないことに気づくことができたこの経験は、これから生きていく上で必ず大きな強みとなると思います。今ある当たり前に感謝し、今を大切に生きていこうと思います。（1）</p>
4.	<p>コロナ禍を1年間経験して、多くのことを感じ考えさせられました。その中でも最も強く感じたことは、人間の底力だと思っています。また、矛盾するようですが、人間の弱さのようなものも感じることもできたように思います。この1年間、働き方や学び方、生活の仕方など、多くの「新しい」が要求されました。そんな中でも、人々はどうにかしようと知恵を絞り出し、考え、何とかここまで対応してきたように思います。これは、紛れもなく人々の努力の賜物であり、大きな財産であると考えます。しかし、逆の捉え方をすれば、これらの進歩はやろうと思えばできたことであったことの証明になってしまうとも考えられます。現在、教育界で注目されているオンラインでの学習は、全く話が出ないわけではなく、今回のコロナがその実施の後押しとなったことは間違いありません。これは、人間の弱さを感じる大きな点でした。何かを変えることや生み出すことに対する力の弱さを感じました。デジタル化という面では、教育界にとどまらず、これから訪れると再三言われているインターネット社会に対し、パソコンが使えないにも関わらずそれと向き合っていく、今回のコロナの影響でそれを余儀なくされ、やっとのことでそれを習得した人はどれほどいるのか、そして、その人たちにとってそのような能力や技術を習得せざるを得ない状況となったことは、果たして悪いことだったのか。これらを考えても、人間のそういう弱さが見えると思います。コロナ禍は、人々をさまざまなことに気づかせ、成長させたと言っても過言ではないのではないのでしょうか。（1）</p>
5.	<p>私は、コロナウイルスが蔓延する世の中になって、「今世界の歴史の中で重大な場面に立ち会っている」と感じるが増えました。4月に出了た緊急事態宣言の時も、現在発令中の二度目の緊急事態宣言下のいまま、目に見えないウイルスに立ち向かうために我々の行動を制限し自粛をするというのは、生きてきた中で初めての経験だと感じています。いつか歴史の教科書に大々的に記載されるのだろうかと思うと、凄い時代を生きているなと感じます。コロナウイルスには散々、夢の大学生生活やお出かけなどの楽しい日々をつぶされてきました。ですが、コロナ禍であるからこそ普通の日常がどんなに良いものであったかが実感することが出来たとも感じています。最近では、いつまでもコロナウイルスに恨みを持つのではなく、コロナ禍で自分がどう楽しく生きていくかを考えていこうと思うようになりました。改めて今日までを振り返ってみると、withコロナの世界でも自分なりに充実した大学生生活（大学の友達と遊んだり、一緒に課題に取り組んだり等）を作り上げることが出来た一年間だと思いました。（1）</p>
6.	<p>コロナ禍で特に強く感じたことは、適切に情報を断つことの必要性である。私はLINE、TwitterなどのSNSを使用しているが、これらのSNSを使用すれば必ずと言ってよいほどコロナウイルスに関連する言葉やニュース記事のリンクなどが表示される。正直、コロナウイルスに関する情報は大量にあり、中には不安を煽ることを意図しているかのような記事もあるため、見ていると疲れてしまう。ネット記事は見出しのインパクトが強く、つい内容を知りたくなってしまうが、不快感や不安を感じる内容も多い。そのため、コロナウイルスに関する情報に関してはネット上ではあまり触れないように意識している。情報に触れることが自身のストレスに繋がってしまうこともあるため、適度に情報から離れてみることの重要性を感じた。また、緊急事態宣言や外出自粛要請に伴い、「自由」に伴う「責任」について考えさせられた。日本では、政府による強制力を伴う措置は出来ない。だからこそ、日本に住む私たちにはより強い自制心を持つことが求められるのだと思う。「感染拡大は政府のせいだ」という趣旨の政治家の発言やネットの書き込みを時々見かけるが、全てを政府に押し付けるべきではないのだと思う。改めて、一人ひとりが感染拡大防止に協力しようという意識を持つことが求められていると思う。（1）</p>
7.	<p>コロナ禍において、各国の首相や大統領への関心が高まり、改めてリーダーの重要性を実感した人が多いと思います。私自身、日本のメディアだけでなくCNNやBBCなどの外国のメディアを通して、各国のコロナ対策に関心を持ちました。その中で気がついたことは、男性に比べ、女性のリーダーが効果的な対策を行っていたことです。ニュージーランドのアーダーン首相、ドイツのメルケル首相、そして台湾の蔡英文総統は、未知のウイルスに対して常に先手の対策を講じ、状況が悪化した際には自らの言葉で国民に訴えかけていました。日本は女性の国会議員比率が193カ国中165位で、G20諸国では最下位という状況ですが、コロナ禍での各国の女性リーダーの活躍により、日本でも女性への偏見などが無くなり、性別に関係なく優れた人物がリーダーになってほしいと思います。（1）</p>

(manabaアンケートの回答より抽出)

ねばならない。それが2021年を生きる者の責務だと思います」と結ばれた専門家のインタビュー記事²⁷⁾を紹介した。

表8には、この授業の事後アンケート（提出者46名）の内容を抽出した。まとめでふれた「コロナによる問題の顕在化」（8-1・2）や、教育や政治の重要性（8-3・4）の指摘、また一市民として世界の報道にふれる必要性を感じたという意見（8-5～7）もあった。本授業のねらいは世界各地の現状を知ってほしいという点にあったが、グループ活動という形をとることで、結果的に他人の意見からの学びや市民意識の醸成といった公民的資質の養成にもつながったことがうかがえる。

IV. 2021年度

（1）春学期「地理学概説」

筆者は、2021年度春学期の担当授業について、基本的に対面形式とした。社会専修1年生対象の同授業では、まず5月21日の回に先立って、「コロナ禍（コロナ下）を過ごして感じていること」（400～500字程度）をmanabaのレポートに記入し、提出後は受講生間の相互閲覧を可能として2名以上の文章にコメントをつけてもらうこととした（提出者41名）。このうち7名のレポート内容を示したのが表9である。2021年度入学生は、現役生の場合、学業・部活などで高校生活の仕上げとなる時期にコロナ禍を迎えており、9-1・2はそのことへの悔しさをにじませている。他方、コロナ禍への対応法や自身の内面を模索したり、社会のオンライン化を感じ取ったりする所感もあった（9-3～5）。また、コロナ禍の長期化にともない、状況への「慣れ」（9-6）や自分の「負の感情」（9-7）にふれた記述もみられた。

5月21日の授業では、NHKスペシャル「パンデミック 激動の世界9 「子どもの学びは守れるか」（2021年4月25日放送）の録画を視聴した。同番組は、大阪市立難波中学校（浪速区）を舞台に、コロナ禍における3年生の姿を追ったド

キュメンタリーである²⁸⁾。授業では、理解を助けるために、大阪市の地図やコロナ関連のできごとを時系列でまとめたもの（前掲表1）を配布したほか、埼玉県・東京都・大阪府の感染者数の推移（前掲表3の一部）やコロナ関連の情報²⁹⁾、さらに折からの第3波と教育の関係を上げた新聞記事³⁰⁾を提示した。

この授業の事後アンケートの抜粋が表10である（提出者32名³¹⁾）。番組では、同じ大阪市内のICT教育モデル校（市立大和川中学校（住吉区））の取り組みも紹介されていたが、むしろ10-1～3のように教育における直接的なふれあいの重要性を述べた感想が多かった。国や地域などが学校の外から教育を支える必要性を訴えたり（10-4・5）、自身の体験とからめながら現状への不満を述べたり（10-6・7）した記述も印象に残った。

同じ「地理学概説」の最終回（7月16日）では、「数字でみる日本のコロナ」と題してグループ学習を行なった。これは、表3（前掲）のデータ³²⁾を提示した上で、3～4名からなる各グループに都道府県を割り振り、前章の「地誌学」同様にmanabaプロジェクト機能を使ってグループごとに発表してもらった。表3のうち発表の対象としたのは、北海道・宮城・秋田・茨城・長野・愛知・大阪・兵庫・広島・福岡・沖縄の11道府県であり、学生たちにとって身近な埼玉・千葉・東京・神奈川は対象から外した。受講生の中には、担当県のデータをグラフ化してグループ内で共有するといった工夫をする者もいた。授業では、発表後にコロナ関係のデータ³³⁾や新聞記事³⁴⁾、さらに関連する著作（前述の『武漢日記』・『コロナの時代の僕ら』）を紹介した。

本授業の事後アンケート（提出者41名、表11）では、メディアの情報が東京など大都市圏に偏りがちなことに対する気づき（11-1・2）や、自身の今後のコロナ対応に活かしたいという意識（11-3・4）、同グループの他の人や他県担当者の考え方からの学び（11-5～7）といった感想が寄せられた。また、11-8にある「少ないから

新型コロナを題材とした大学地理学授業の試み

表7 2020年度「地誌学」「コロナからみる世界」対象記事

	日付	見出し
1.	2. 2	「武漢からじゃないだろうな」中国、自衛へ住民ら街「封鎖」 新型コロナウイルス
2.	10.20	(世界発2020) シンガポール、屋台街もデジタル化 政府が旗振り、コロナ禍で加速
3.	5. 3	(コロナ危機と世界) 途上国の危機：上 止まった経済「貧困の津波」 突然解雇、150キロ歩いて帰郷 [インド]
4.	4. 8	礼拝の場、感染連鎖 禁止しても信徒強行 新型コロナ [パキスタン・インドネシア・イスラエルなど]
5.	7.20	アフリカ、対コロナ最新技術 一足飛びに普及「カエル跳び」[ケニア・ガーナ・セネガル・ルワンダ]
6.	9. 1	「登校前提」、保護者や教員は不安 仏労組「再開基準明確化を」 スペインで登校拒否運動
7.	12. 3	(世界発2020) ポーランドの炭鉱、二重の苦境 コロナ禍と気候変動
8.	11.30	ワクチンいかが、ロシア攻勢「安全・安価」EU加盟国にも 大規模臨床試験後回し、世界初承認
9.	8.14	感染拡大、先住民の不安 相次ぐ長老の死「歴史消える」 ブラジル・アマゾン 新型コロナ
10.	4.29	(世界発2020) 米、高まる「サバイバル」意識 富裕層、シェルターに注目
11.	11.24	感染防止、下水を調べよ 豪、コロナ検出なら住民検査
12.	6.30	日系人、「雇用の調整弁」今も ブラジルから定住化、30年 コロナ禍、職も住も同時に失う

注) すべて2020年の朝日新聞記事。[]内は当該記事で取り上げられている国(見出しにないもののみ筆者追記)。
(朝日新聞記事データベース (<http://database.asahi.com/library2/main/top.php>) により作成)

表8 2020年度「地誌学」事後アンケート(「コロナからみる世界」)

1.	私たちのグループは4人のグループでしたが、それぞれ違った考え方があり、私とは違った視点を持っていたので、話をしているととても面白かったです。現在新型コロナウイルスの影響で起きている様々な問題の記事を読み、世界の現状を知りました。私はこの話を聞いて、もしもコロナが収束したとしたら、その後の世界はどうなるのだろうかと考えました。この記事に書かれているような苦しみはなくなるのだろうかと考えたとき、私はそうは思いませんでした。今回のまとめでもあったように、このコロナ禍によりもともと存在していた問題が顕在化されています。そしてその問題は、コロナが収束したからといって勝手に解消されていくことはないと思います。私たちはコロナが収束した後でも、これらの顕在化された問題に向き合っていく必要があると思います。今新型コロナウイルスによる世界的な混乱の中で人々の間には亀裂が生まれつつありますが、問題が見えてきた今だからこそ、人々は協力して目の前の問題に向き合っていくべきだと感じました。(1)
2.	プロジェクトを通して様々な問題を見てきた。コロナの恐ろしさは感染の危険性、命の問題はもちろんだが、「コロナウイルス蔓延の状況に置かれた人々」の言動や生活が何より怖いと感じた。差別や偏見、過労死や失職など、じつにさまざまなことが弊害として起こる。この混乱が世界をさらに惑わしているように感じる。授業の終盤で触れたように、もともとあった問題が今浮き彫りになっているのである。今回いろいろな記事を読んだり、このような世の中に生きていて感じたことは、ウイルス収束後も自分の感情の財産として、忘れずに生きていきたい。(1)
3.	今回のようなグループ活動を通して、コロナによる影響を様々な視点から見て、考えることができ、この1年間を締め括る良い学びができたように思う。特に、私たちの担当であった記事では、雇用の調整弁として扱われやすい外国人労働者についてのものでしたが、その内容はとても印象的でした。リーマンショックの当時のような、過去の悪い歴史を繰り返しているようで、歴史から学ぶという姿勢がまだ足りないのではないかと感じました。また、根本的な解決には教育が必要という意見が、グループのメンバーと一致し、教育の大切さや、不自由なく教育を受けることができたことに対して、強い感謝の気持ちが湧きました。ボランティアなどで、ぜひ、そのような教育支援に協力したいと感じました。他のグループの発表も大変興味深い内容が多く、自分の担当外の記事に関しても、改めて深く考えてみたいと感じました。今回のようなグループ活動は、普段は聞けないような他人の意見や感じ方を伝え合うことができ、非常に有意義な時間であったと思います。今年度は、今回の授業で終わりになってしまいますが、来年度以降はもっと多くの仲間とコミュニケーションを取り、多様な意見や考え方を取り入れたいと思います。(1)
4.	これまでどこかで指摘されていたり、ニュースなどで報道されていた問題がコロナ禍で表面化してしまったというのは、国民である私たちが原因であると思う。もちろん政治家の方たちが片付けることできないというのもあると思うが、私たちが任せきりで、政治への関心が遠のいているのが根本的な原因であると思う。これにはやはり、教育もかかわっていかなくてはならない。学校教育の中で、政治に関わることの重要性を説き、意識を高める。これからの未来を決めるのは今の大人かもしれないが、生きていくのは私たちが。小さな力かもしれないが声を上げていくことが重要だと思う。(1)
5.	まず、このコロナに対しての考え方が様々であることを改めて実感した。50人弱のこの教室内でもここまで見解が違うのなら、国として話がまとまらないのも無理はないなと思った。私自身はこのコロナウイルス自体に恐怖を感じないどころか、現在の行政の対応や国民の反応はやりすぎではないだろうかと思う。というのも、根幹にはほかの感染症と何が違うのだろうかという疑問があるからだ。特に、インフルエンザとはどう違うのか。私たちは本当に今の行動に至る判断をするに足る情報を得ているのだろうか。もはやテレビなどで流れて自分たちに入ってくる受動的な情報の内容が変わることはない。誰かの言伝ではなく、私たち自身が積極的に情報を求め、判断する必要があると思った。(1)
6.	私は、全ての物事において、自分を中心に考えてしまう嫌いがある。ふとした時、自分を客観視すると、そういった自分の癖に気づく。コロナ禍にある現状も、自分の周り、身近な人が感染していない為に、安心してしまふ節がある。また、人命と経済、どちらを優先すべきか、という話になった時、大抵の人は人命を優先させるだろうし、それが正しいとも思う。しかし、新聞記事を読んでいくうちに、私には、それが結局のところ理想論に過ぎないのではないかと感じるようになってしまった。自分が担当した新聞記事を読んでも、「これが現実か。」と落胆するほかなかった。今回のプロジェクトで、様々な視点から世界規模の現状を知ることができたのは、地球の一市民として有意義であったとともに、今後は新聞・ニュース等でより積極的に世界の流れを知るべきだと感じた。(1)
7.	今回、様々な国のコロナ禍での状況について知ることができ、それぞれの国が宗教・経済など何らかの問題を抱えていることがよく分かりました。普段ニュースを見ていると、なかなか海外の細かいトピックは放送されることも少なく、どうしても日本のことに情報が偏ってしまいます。今回私は11の記事の発表の際に出た「日本の政策は受け身ではないか。」という話を興味深く思いました。確かに考えてみれば、日本は感染経路の追跡の大切さを述べながら具体的に積極的な行動をあまりしてこなかったように思います。オーストラリアでのやり方を全て真似する必要はありませんが、その「攻め」の姿勢を見習うことはできるのではないのでしょうか。また、その攻めの姿勢を取り入れる原動力になるのは、オーストラリアの取組みを知った多くの日本人々々がその行動の必要性を訴える声をあげることはないかなと思います。そのために、私たちは日本国内の情報だけにとらわれず、海外の状況も知っておくことが重要なのではないかなと思います。せっかく離れていても伝わる便利な通信技術があるのだから、コロナ禍においてもオンライン上などで他の地域と繋がることを大切にしていってほしいかなと考えました。(1)

(manabaアンケートの回答より抽出)

表9 2021年度「地理学概説」事前レポート（コロナ禍の感想）

1. 私がコロナ禍を過ごして感じたことは、自分たちの好きなことを制限されてしまい悔しい気持ちと悲しい気持ちがありました。私は高校の部活でバレーボールをやっていました。引退まであと3ヶ月くらいというときに緊急事態宣言がでて学校に行けなくなり、部活も出来なくなり家にいなければいけなくなりました。友達とも学校で会えなくなり、家でいつもつまらない日々をすごしていました。最後の県大会にかけていたため部活が出来なくなるということはすごくつらかったです。6月の学校再開で友達と会えたことはすごく嬉しかったです。インターハイが中止になり、そのことによって県大会も無くなりつらい部分もありましたが、顧問の先生に引退試合を設けていただいたことでその試合まで頑張ろうとモチベーションを保ち続け、試合をして引退しました。できるだけだろうと思っていた文化祭がなくなり高校3年生の行事は体育祭しかありませんでしたが、行事ができたことに感謝の気持ちしかありません。人との交流の大切さをコロナ禍をすごして改めて理解する事ができました。(1)
2. コロナが徐々にといてもたしか1日100人も感染者はいなかった程度の高2の学年末考査の直前にいきなり学校の休校が決まった。当時僕はテストもなくなり遊び放題だと嬉しかった。またちょうど受験のために塾に入ったばかりだったので勉強のモチベーションも上がり最初はコロナありがとうと思っていた。しかし、緊急事態宣言が出て友達とご飯を食べたり、大好きだったテニスも出来なくなり引退試合もできず悲しかった。本当に悔しかった。そこから僕は受験勉強に切り替えることが出来たので高3の受験が終わるまでの間は何もコロナに対して感じるものはなかった。だが、受験が終わりが卒業旅行となって海外はもちろん国内の旅行も制限され、(僕たちは4回ほど泊まりに行ったが)常にイライラしていた。そして今、思うことはなぜ日本はこんなにも我慢するだけの対策しかしないのかということだが、僕が何か言ったところで変わるものでもない。最近ではコロナに感染しないような趣味を楽しむことにした。例えば僕は音楽が好きなので、お気に入りの曲をギターで練習したり、体を動かすこともすごい好きなのでランニングマシンを買って好きなアーティストのライブを見ながら走ったりしている。(1)
3. 教育面では私たちは受験期にコロナ禍とぶつかり大変な思いをした。しかしこの状況は必ずしもマイナスではないと思う。教育を受ける側としては、自粛期間の中自分たちで考え、計画し、勉強しなければならなかった。塾で決められたものではなく自分たちで決める主体性が備わるような時期だったのではないかと。そして入試の結果においてもこの時期にしっかり勉強できた人は結果が出たし、できなかった人は思うような結果にはならなかったと思う。これはあくまで推測だが今年は個人の努力や主体性が大きく反映される入試だったと考えられる。また教育をする側においてもニュースを見てわかる通り、コロナ禍で浮き彫りになった教育の課題が沢山ある。オンラインの整備や宿題の遅れなど課題が可視化された。教育を受ける側もする側も双方にとって決してマイナスではないと思う。また地理的な面でも、どこにも行けず苦しい日々を過ごし、観光や旅行が出来ない状況にあった。確かにその観点では地理的には被害を受けたわけだが、私の中では地元を知る機会だったと思う。今でもそうだが遠くに出歩くことのできない中で、いかに安全に地元で楽しみを見出せるかを考えるうちに、公園が多く体を動かしやすいなど自分の地元の長所に気づくことが出来た。これもまた見方によってはプラスに考えることが出来たと思った。マイナスに捉えることは誰でもできるがプラスに捉えることが大切だと考えるようになった。(1)
4. 去年の3月頃の緊急事態宣言から始まった新しい生活は、外出制限、マスクの常時着用、その他活動の自粛などで、自分たちの今までの生活から一変しました。新型コロナウイルスは今現在でも世界中で感染していて、感染者に対する死亡者の割合もとても高いです。そういった中、自分自身、コロナ禍で一年余り過ごしてきて、色々な事を考えてきました。まずは自分がもしコロナになったらどうしようという恐怖を感じるようになりました。これは誰もが感じる事だと思います。でもそれ以外にも感じることもあります。それは、自分自身について考えることが増えてきたと感じています。自分自身というのは、自分が今何をすべきかどうするか、自分が今後どういった事をしてどういう大人になってどういった将来を歩んでいくかといったビジョンを考えていました。コロナ禍で自宅にいる時間、つまり一人である時間が増えて、今まで以上に色々な事を考える時間が増えたのが影響しています。今後もコロナ禍での生活は続いていきます。今自分がやるべきこと、そしてそれを実行する行動力、そういったことを大事にこれからも感染対策をしっかりしていきながら生活したいです。(1)
5. コロナ禍でずっとマスクをしていて表情が読み取りづらいので友人とコミュニケーションをとるのがとても難しく感じました。そのため仲良くなるのに時間がかかりました。物理的にも精神的にも距離があるように感じます。孤独を感じる一方、一人の時間が多いので開放的にも感じます。自粛の時間のほとんどを家で過ごし趣味などに割く時間が増えたのでストレスを感じづらくなった気がします。また自粛期間は受験期とちょうど重なっていたので誘惑などが少なく自粛を苦に感じることは少なかったです。ですが大学に入ってから友人とまだ外に遊びに行けていないので早く収束してほしいと思います。また大学などにオンライン授業が導入されたり、会社もリモートワークが増えたりと新しい社会の形に変わっているように感じました。コロナによって今まで当たり前だったものに代替案が出てきて、必要のないものが見えてきたので、コロナ終息後は良かったものは引き継ぎよりスマートな社会にしていく必要があると思いました。(1)
6. コロナによって一変してしまった生活を経験し、当たり前だと思っていたことが当たり前ではないことに気づかされた。そして、中学の時の担任が言っていた「この世で一番怖いものは目に見えないウイルスだ」という言葉が身に染みて感じられた。コロナ下の生活の中で考えたこととして、「時間の使い方」が一番大きい。コロナの影響で学校が休校になったり、出かける機会が減ったりと、生活の中で制限されることが増えたが、その分自分で使える時間が確保できるようになった。しかし、自分の生活を振り返ってみると、その時間を有効的に活用できていなかったと思う。世の中には、その時間を活用して資格を取ったり、新たな趣味を見つけたりしている人も大勢いる。いつ何が起るかわからない人生なので、自分が興味のあることには積極的にチャレンジして、悔いが残らないように過ごそうと思った。また、「慣れることの恐ろしさ」もある。コロナ流行当初は、増加していく感染者数を見て不安な気持ちになっていたが、今ではそれが普通となり、何も思わなくなってしまう。また、そのような人が大勢いることも、テレビで映し出される街の様子などを見ているとよく分かる。やはり、今の状況を当たり前だと思わない意識が大切だと思った。コロナによって、不便になったことも増えたが、これまでの日常が完全に戻る可能性は低いので、新しい生活スタイルに適應できるよう自分の意識を変えていきたい。(1)
7. 私がコロナ禍を過ごして感じていたことは、行動制限による不自由さです。大学生になって行動範囲が広がるとともに、未だにサークルや海外ボランティアなどの新しい活動に期待している自分がいました。そして、自分自身が他人の行動に対して抱いてしまう負の感情です。それは、ソーシャルメディアで外出している人たちを見るときに感じています。なぜならば、私も本当は外出したいのに自粛せざるを得ない状況なので家で大人しくしているからです。政治家も自粛を訴えています。医療従事者も必死になって未知のウイルスと戦ってくれています。それなのに、ソーシャルメディアで見かける不要不急の外出をしている人たちは一体、何を考えているのでしょうか。いちいち他人の行動に対して首を突っ込んでしまう自分に強い罪悪感を感じてしまいます。しかし、外出してしまう人たちの気持ちも十分わかります。そのため、私たちは「不要不急の外出は自粛」という言葉に支配されているのではないのでしょうか。その認識も人によって様々だと思うからです。(1)

(manabaレポートの内容より抽出)

新型コロナを題材とした大学地理学授業の試み

表10 2021年度「地理学概説」事後アンケート（番組視聴の感想）

<p>1.</p> <p>2.</p> <p>3.</p> <p>4.</p> <p>5.</p> <p>6.</p> <p>7.</p>	<p>大阪の公立中学校の現実をヒシヒシと感じる動画だった。また、教育体制の脆さが完全に露呈した状態だったと思う。まず、動画に登場した生徒については、互いに様々な背景、個性を認め合い共生の考えのもと活動していても驚いた。私の中学校ではイジメはないが、社会でのマジョリティーが持つ考えが中心になっていったと考えた。一般的には弱みとなる生活の厳しさを勉強する、結果を出そうとする努力に変えていく姿は非常に印象的だった。次に、学校側の行動に関しては、習熟度別の授業を展開するなど、先生方の懸命な話し合いを行っていたことが分かった。ただ、進路に関する問題に対しては有効な手を打つことが出来なかったということも分かった。もちろん、生徒が希望する全ての学校の詳細な情報を伝えることは不可能だが、第一希望の学校に関しては出来る限りの情報を集めてあげる必要があると思った。最後に、タブレット端末を使用しGIGAスクール構想については生徒のことを一番に考えるならば早めに推し進めるべきだと思った。但し、現場が耐えられないならば部分的な使用でも効果は期待できると考える。全体を通して教育機関は「対面で先生が教える」という前提が崩れた瞬間に壊れてしまったのだと感じた。(1)</p> <p>子どもは、勉強や進路など様々なことに不安や悩みを抱えている。その中で、誰かに頼ったり、誰かに助けってもらったりする環境はもちろん必要である。しかし、コロナの影響で人との交流が減り、子どもが誰にも頼れず1人で抱え込む、という状況が発生しているのも事実である。だからこそ、学校から子どもたちの交流の場を奪ってはいけなかった。人と実際に会わなくてもコミュニケーションがとれるネットは便利であるが、やはり、対面でなければ伝わらないこともたくさんあると思う。特に子どもの時の経験は、その後の将来に大きく関わることだと思うので、子どもたちの交流の場というものは確保する必要があると思った。コロナ下の生活を通して、人と対面で話すことのできる時間が、いかに貴重であるのかよく理解できたので、そのような時間を大切にしていきたい。(1)</p> <p>今日の動画を見て、やはり人とのつながりが大切なんだなと思いました。学校での子供同士のつながりや、教師とのつながり、学校外での大人とのつながりを見て、人のあたたかさ、つながりの力を感じました。動画の中ででてきたデータにもありましたが、人間関係の豊かさや学力は関係して、豊かである方が学力が高い傾向にあります。人間関係を豊かにすること、人とつながることが重要であることを再認識しました。不登校の子が学校に行きにくかった原因は男女別の制服にあり、体は女の子であるが、心は男の子であることを明かして、それを周りに伝えてからのの方が学校に行きやすくなり、友人ができたという話を聞き、周りが多様性を認めたことと、学校が制服のことで動いたことがなければ、不登校のままだったかもしれないと思うと、その2つは重要であると感じました。コロナ禍で、教育のデジタル化が進み、これまでと比べ、人とのつながりが減っている今、私にできることはあまりないとは思いますが、自分が教師になれた際のために、人とのつながりの大切さを理解し、多様性を認め、生徒のために動けるように、これから頑張って学んでいきたいと思いました。(1)</p> <p>コロナという世界的なパンデミックでは、弱い部分が浮き彫りになってくるのだと強く感じた。その弱さというのは、医療の発達が遅い国での死亡者増加といった大規模な事柄だけでなく、親の収入や人とのつながりの薄さから起きる教育格差における弱者側といった、身近な問題だが普段あまり目を向けられない事柄でもある。コロナによる被害がこういった社会的弱者を特に苦しめているのだから、国は一刻でも早く彼らの生活を救う政策をし、学校はこの問題で苦しむ生徒たちに微力でも力添えをしなければいけないと感じた。(1)</p> <p>この授業やビデオを通して、周囲の大人が子供たちの悩みに気付き、共に悩んで改善するための努力を惜しまないこと、続けていく姿勢が1番の子供たちの安心に繋がるのだと改めて感じました。それと同時に、学校の存在意義をとても考えさせられました。休校中の学びが失われたことを、子供や家庭のせいにしていないか。という疑問にはとても共感しました。様々な家庭背景があり、多様な子供たちが通う学校が、「1人でやりなさい」と丸投げしてしまうのは無責任だと私も思います。大人が知恵を探り合い、「密な関わり」の意義を今一度考え、学校でできることを最大限行っていくべきだと感じました。ビデオでは、学習支援団体として「コスモス」が紹介されていましたが、私もそういったボランティア団体に所属し、地域貢献していきたいです。学校だけでは手が回らないところも、地域がサポートすることで、学校の負担が減り、「コスモス」のような学校や家庭とは違う目線から、子供たちのことを見つめ支える機関が地域にあることは良いことだと思います。友達もそうですが、大人と会話することで、本当にやりたいことをみつめ学ぶ意欲が育てられるという話は、本当にそうだと思います。私自身も、先生や友達、地域の大人など、周囲の人との関わりの中で夢を育ててきたからです。将来がうまく見つけられない環境にいる子供たちが、夢を見つけ、将来の幅を広げてあげられるような教師、大人になりたいと、この授業を通して強く感じました。最後に、デジタル化により、学校現場も混乱に晒されている中、奮闘されている先生方を見て、文部科学大臣が「デジタル化によって教師の労働環境も改善されると信じている。」と述べていましたが、信じているだけでなく、地方の公立学校にも温かい支援が届くように、教師が本来の、子供に寄り添える仕事ができるように、現場の課題に耳を傾け、解決して欲しいと感じました。(1)</p> <p>私はこのコロナ禍での映像を見て感じたのは仕方がないという理由で納得させることはあまりに酷なことだということです。コロナだから、部活動を停止しても仕方がない。コロナだから、学校を停止させるのも仕方がない。私自身、その言葉で何度も自分をいきかせてきました。けれど、その我慢は本当に結果となったのでしょうか。今も続くこのコロナの脅威はあの我慢によって少しでも抑えられたのでしょうか。映像の中で部活をやっている生徒を羨ましく思いました。私は全面停止のまま最後を終えたからです。合理的な判断だったとは私も思います。けれど、だから仕方がないのだと終わるのではなく、どうしてそうせざるをえなかったのか、他に講じられる案はなかったのかを生徒に伝える必要があると思います。この映像でそんな子供たちのために頑張る人々の姿をたくさん見ることが出来ました。たとえ苦しい状況下であっても親身になってくれる大人がいるだけで、子供に少しでも安心を与えられるのだと思います。私も、このような事態の時に諦めずに最後まで子供の学びを尊重できるような大人になりたいと思いました。(1)</p> <p>私は浪人をしていたということもあり、コロナ禍における高校生活を直接体験したことはありませんでした。そのため、今回の授業によって初めて、コロナ禍における高校[番組では中学]生活を目の当たりにし、とても辛い思いになりました。特に、部活動ができないという点や、学習状況の遅れという点が印象に残ります。高校[同上]の3年間を部活動にかけてきた児童生徒にとって、夢や目標を失うということは私が想像もできない程苦しいことだと察します。また、家庭の経済状況による学習格差や学校生活の満足度の差異など、様々な点で問題が残っていると思いました。そしてオリンピックは行なうのに、運動会や体育祭、部活動は禁止にする文科省を含めた政府役人の考えに憤りを感じます。本当にコロナ禍を一刻も早く打開しようと考えているのか、疑問に感じました。(1)</p>
---	--

(manabaアンケートの回答より抽出)

表11 2021年度「地理学概説」事後アンケート（「数字でみる日本のコロナ」）

1.	今まで東京都の感染者数の推移はメディアで知ることも多かったのですが、他県の推移は知らなかったもので、今回の授業は全国の感染者数を意識する良いきっかけとなりました。私は広島県の担当だったのですが、自分が想像していたよりも感染者数が多く驚きました。また、他のグループの発表を聞いて、人口と人口密度の関わりや近隣の県との関係を改めて認識することが出来ました。調べを進めていく上で、日本政府の政策を振り返ることも出来、これから私たちがすべきことを考えさせられました。最近では、自分自身感染者数への関心が低下していたように思うので、この授業を契機にコロナウイルスに関する興味を継続させていきたいです。（1）
2.	2020年から現在に至るまで、毎日のようにコロナ関連のニュースがテレビの大半を占めています。しかし、私を含め多くの人々がコロナに対する意識が薄れてしまっているように感じます。事実として、東京の感染者数が3桁を超えて発令された1回目の緊急事態宣言のときと、つい先日発令された4回目の緊急事態宣言とは明らかに感染者数に差があるにも関わらず、危機感は一回目の時よりも感じていませんでした。しかし、今回改めてコロナについて詳しく調べることで、感染者数の増え方の異常性を強く感じる事ができました。また、今回担当した北海道がテレビで報道される機会はほとんどなく、そういった地域について他県と比較して考察することができて良かったです。これからも東京や大阪以外の地域にも関心を持ち、政府や自治体の動向にも注目していきます。（1）
3.	今回のプロジェクトで、皆のコロナに対する考えや、様々な角度からのコロナ蔓延の考察を聞くことができ、コロナ禍を生きていく上でとても参考になりました。皆がコロナに対し憤りを感じている中、多くの人が前向きにかつ冷静に現状を捉えていて、自分も「ひとごと」としてコロナを考えるのではなく、「自分ごと」として考えなければならぬと強く思いました。また、膨大な情報が行き交う中、正しい情報を見極め、担当の県のコロナ感染者数の推移について調べた経験は、ワクチン接種など自分で選択しなければならない場面において役に立つと思いました。今回、地域ごとで多少別々な問題を抱えていることを知ったので、遠方に住む祖父母や親戚、友人に連絡を取り、気にかけるようにしようと思いました。（1）
4.	今回の取り組みでは、自分だけでは狭い視野でしか見れなかった問題をグループで話し合い、また他のグループの発表を聞くことで、いろいろな角度からの見解を自分の中に取り入れることができました。同じ資料を見ても、考え方や着眼点が多少なりとも異なっており、新しい意見として聞くことができて面白かったです。また、今回の取り組みを通して、各都道府県のコロナに対する対策、これからどうしていくべきかなどを考えさせられました。ちょっと自分がマスクをつけなくなつてとか、遊びを我慢しなくなつてとかコロナに対する緊張感がなくなつてきた今、コロナについて考えることで気を引き締められました。（1）
5.	今回の授業を通してコロナウイルスの各県における感染者数の推移やワクチン接種率について詳しく知ることができただけでなく、自分の担当した県はもちろんですが、他のグループが担当した県についてもデータから推察できることやその県の状況についても学ぶことができました。また、同じグループ内で同じ県を担当していてもそれぞれ視点が異なるため、着眼点や注目する点にも違いが見られ、改めて気付く点もあり、このようなグループワークや発表を用いての学習は、より理解が深められるため、とても興味深く感じるとともに楽しく、深く学ぶことができると感じました。また、今回のテーマはコロナウイルス関連であり、この厳しい状況下で生活している私たちは、今の状況から目を背けずに多くのことを把握し、そこから自分自身ができることは何であるかを一人一人が考えていく必要があると思うので良い学習となりました。（1）
6.	今回の授業のプロジェクトでの活動は新型コロナウイルスと関わってきて1年以上たつなかで、日本の感染拡大について見つけなおすいい機会になったと思います。今回私は大阪府について調べ、他の都市圏と類似点や相違点を発見することができました。また、他の都道府県の発表を聞いて、他の都道府県の分析を知ることができました。今回のプロジェクトでの活動を通して、日本の感染拡大をしっかりとするとともに、できることは少ないですが自分たちの行動にさらに注意していきたいと思いました。さらに、新型コロナウイルスが収束が近づいてきたときに、新型コロナウイルスによって変化した社会で自分はどうかこの経験を生かしていけばよいか考えていきたいと思いました。（1）
7.	今回のプロジェクトでは、明確なデータを基に分析・整理・考察をしてきたが、新型コロナ感染者の推移を具体的な数字で見れて、改めて深刻な問題に直面していると感じた。私が担当した茨城県も全国の波に伴い推移が変化していて、更に関東ということもあり、都心の影響もろに受けていると考察できた。違う人のまとめを見ると、人により着眼点が違ったり、より細かく考察されていたり過去の感染症と比較していたりして勉強になった。他の県の発表を聞いてみて、愛知県や大阪府、神奈川県などの大都市では東京に次ぐ感染者推移が見られ、秋田や長野県など都心から離れた場所では比較的感染者が少なく、今回の表を見るだけで日本の各都道府県の特徴が分かり、またその中でも交通が発達し、都心へ流入しやすい場所等では感染者は多く見られた。こうしてみるとGo Toトラベル事業の開始が大きな失敗の要因ではないかとも思われるし、テレワークの充実もやはり必要なのではとも思えた。みんなの考えなども知れて良かったと思う。（4）
8.	今までは千葉県の感染者の推移や東京都の感染者の推移にしか目を向けていなかったけれど、今回を機に兵庫県をはじめ、多くの県の推移について知ることができた。まず思ったのは多い県、少ない県あるけれど多いからダメなのか、少ないからいいのかという見方はどうなのかなと感じた。つまり少ないからいいというのは少ない中でも感染してしまった人達のことを何も考えていない。少ないけれどなくなってしまう命がある中で、感染者の数にしか目を向けないということは少し疑問に思った。また全国と比較し、自分の県の立ち位置を知ることでその傾向と対策を考えることができた。減ったから一喜一憂するのではなく傾向や対策について考えるための数字だと思う。自分の県だけだとわかりにくいけれど他と比較することで、その傾向と対策が分かりやすくなった。地理を学習するときにはこの比較の考え方が大切なのではないかと考えた。その地域の特色を知ったり、世界の傾向を学んだりするときに必要である。これを大切に生徒に地理を教えていきたい。（1）

(manabaアンケートの回答より抽出)

いいのかという見方はどうなのかなと感じた」という指摘は、授業を行なった筆者の配慮不足であり、これをうけてmanabaのコースニュースに補足説明を行なった³⁵⁾。全体としては、同じ11-8にもあるように、状況の俯瞰によって自らの立ち位置を把握するという地理学的考え方の有用性が理解されたものとみられる。

(2) 春学期「人文地理学」

前章(1)と同様、社会専修2年生対象の同授業では、2021年5月25日の授業を「数字でみる世界のコロナ」の回とした。方法等は前節の「数字でみる日本のコロナ」と同じグループ学習(3名ずつ)の形をとった。表2にあげた国のうち、この授業では韓国と上位7カ国(アメリカ~フランス)、そしてインドネシア・南アフリカを加えた10カ国を発表対象とした。その事後アンケート(提出者28名)から抽出した表12では、世界に目を見開く必要性(12-1~3)や、データ³⁶⁾を多角的に読みとる重要性(12-4・5)を認識したという回答がいくつか得られた。さらに授業当時の状況を反映して、ワクチン接種(12-6)や東京五輪開催(12-7・8)についてふれた記述もあった。

なお、12-5には、発表後に参考に供したコロナ関連の著作(前節参照)や新聞記事³⁷⁾の感想も記されている。その第一は、新型コロナに感染した死者を実名で掲載するイタリア紙を取り上げた記事に対し、日本では感染を自己責任と考える人が多いことが科学的対策の障害や差別につながっている³⁸⁾という対比である。もう一つは、「ある国の文明度を測る唯一の基準は、弱者に対して国がどういう態度を取るかだ」という『武漢日記』の一節である³⁹⁾。これらは、自ら担当国の数字とにらめっこした後だけに、ふだんの講義以上に印象に残ったのであろう。また、この授業の最後では、ジョルダノの著作⁴⁰⁾や新聞掲載の漫画⁴¹⁾を引きつつ、単にコロナ前に「元通り」に戻るだけではないかという筆者の考えを述べ

たが、この点も12-6のようにしっかりと受講生に伝わっていた。

同授業では、前年度同様の題目で読書レポートを課した(ただし2021年度は提出任意)。対象図書はカミュないしデフォーの『ペスト』としたが、提出された19編はいずれもカミュを選んでいった(6月29日メ切)。表13はその内容の一部であり、前年度同様、後世への教訓(13-1・2、前掲4-5~7に相当)や教育の意義(13-3、同じく4-8・9)を読みとった記述があった。また、自身の自覚の再認識(13-4)のほか、作品中の「誠実さ」という言葉を鍵としてコロナ禍をとらえようとした感想(13-5・6)もあった。とくに「個人の幸福追求と誠実さのはざままで」と題して書かれた13-6は、自身の体験もふまえ、社会の一員として生きる意味を鋭く問うていた。

2021年度の本レポートでは、字数の多い力作が目立った。課題の条件が前年度同様の400字詰め原稿用紙3枚以上であったのに対し、例えば表12にあげた6編のレポートの平均枚数は10枚と大きく超過している。レポートが任意提出であったという要因以外に、長期化するコロナ禍の中で大学2年生となった2020年度入学生が抱える問題が依然として大きいという事情⁴²⁾もこれと無縁ではないだろう。

(3) 春学期「地理学」

越谷キャンパス3学部(教育学部・人間科学部・文学部)の学生を対象とする共通教養科目「地理学」では、例年、春学期に「ヨーロッパの歴史地理」の副題で講義を行なっている。本授業では、最終回直前にあたる2021年7月20日の回を「病気の歴史と今」と題し、世界およびヨーロッパの感染症の歴史とコロナの現状を説明した。それにあたっては、ここまで本稿であげてきた資料類のほか、感染症の歴史に関するいくつかの著書⁴³⁾を参照した。また、ヨーロッパを中心とする新型コロナ感染者数の表⁴⁴⁾や、日本と欧米のコロナ対応を比較した新聞記事⁴⁵⁾も紹介した。

表12 2021年度「人文地理学」事後アンケート（「数字でみる世界のコロナ」）

1. 今回の特別回では様々な国の視点からコロナについての考察を聞くことができました。普段気にするのは日本とせいぜいアメリカやイギリスなどの国でした。私はロシアを担当しましたが、ロシアの感染者数の推移を見ることで感染対策や医療体制、ワクチン接種の状況などの実態がどのようなものなのか気になりました。そして、グループでの話し合いや他グループの発表を聞き、同じ国を考察しても異なる見方があること、違う国でも共通している点があることに気づきました。また、外国を基準としたときに日本と比較することで、普段日本を基準に考えているときには見えてこないものが見えるのではないかと感じました。特にこのコロナの問題は、日本や一國に集中して見るだけではなく、マクロな視点を持って見ていく必要があると感じました。（2）
2. 今回の特別回での課題を通して、その国を中心にして世界を見るのか、世界からその国を見るのかによって、同じ状況でも見えることが異なってくるということを感じました。また、宗教、文化、人口構成などを踏まえて考察をしているグループがあり、実に様々な視点があるなと感じました。発表の中で「南半球に目を向けていない」という意見が出ていました。私もエクセルの表を読み取るときに東アジアや欧米の国の数値は詳しく見ましたが南半球にある国については詳しく見ませんでした。いかに自分の視野が狭いかを痛感させられました。（2）
3. 今回、コロナについて考えたが、表を元に様々なことを知ることができた。ニュースでは知ることの出来ないことも、自分で表を見て読み取ることが知ることができた。また、コロナの感染がどのようにどの国で広がって行ったのかを知ることができた。私は今、日本にいるからこそ、世界がどうなっているかは分からない。日本においても、自分の住んでいるところしか見ていないわけだから、緊急事態宣言が出ているところがどうなっているのかを肌で感じることはできない。だからこそ、自分で情報を知り、理解することで、コロナに対して予防しなければならぬ自覚を改めて持つことができたと思う。（2）
4. 今回はコロナに関するデータを参考にしながらいろんなグループの発表を聞きましたが、今回読み取れるデータから、データ上でこのような結果が示されている原因を考えることが一つ重要なのではないかと感じました。第一にデータから正確に物事を読み取ることも大切ですが、それができた後はそこで止まらずさらに深く考えてみる自分なりに考察を深めることができるようになるのではないかと考えました。例えば今回の発表の際では、データを見ると感染者当たりの死亡率が日本より低いというデータが読み取れたとしたら、ただ、この国は日本より死亡率が低かったですという風にそのまま発表するのではなく、そこから、人口のうちの高齢者の割合に注目してみたり、国の医療制度に注目してみたり、その国の国民性に注目してみたりと「なんでだろう」と自分でデータを見てより深く考えることができるようにしたいと思いました。そのように考えることができるようになればよりオリジナル性のあるアイデアを持った状態で話し合いができると思いました。（2）
5. 発表では、新型コロナウイルスの推移に関する内容のみが取り上げられると予想していた。しかし、実際にはその推移と沐浴やパカンスに代表される行事や気候変化、年齢別人口などの地理的考察を絡めて発表されていたため、尊敬や驚きを感じると同時に、多角的な物事の見方を得られたように感じる事が出来た。また、感染当たりの死者数、いわば致死率について見比べてみると、日本とアメリカの間では大きな遜色がなく、まさに「明日は我が身」というような強烈な印象を受けた。さらに、ブラジルを担当したことで、南北問題や「先進国が掲げる平等」についても改めて考えさせられた。講義資料では、小テストの下に取り上げられていた1の資料が印象的だった。感染に対して自業自得、本人の責任とする日本人の意識傾向が無意味な差別を生み出し、さらには科学的な対策の障害となるという分析的な射ていると感じる。仮に、私が簡易検査キット等の結果、感染したことが分かったら、他者への罪悪感や孤立などで悲観ばかりするのではなく社会のために自分の行動記録を洗い出すなど、努力をしていきたい。また、方氏が著した『武漢日記』にある「ある国の文明度を図る唯一の基準は、弱者に対して国がどういう態度を取るか」という言葉がとても印象的だった。（2）
6. 今回の授業を受けて、各班の発表を聞いて、世界中のコロナウイルスの状況が何となくわかりました。私は、ブラジルの担当で、経済優先政策がとられ、深刻な感染状況が続いていることを調べました。しかし周りの発表で他の国の対応を聞くと、どんどんロックダウンを行っていたり、ワクチンの接種数がとにかく多かったり、やはり感染がそこまで広がっていない地域ではなにかしらの工夫がされていることがわかりました。日本も、ロックダウンとまでは行きませんが、緊急事態宣言によってそれなりに感染拡大を防げているのではないかと思います。しかし、私たちの自覚にもあるように、もう一年もの期間コロナウイルスと戦ってきて、多少の慣れがあることも事実です。それが油断に繋がりがり、今年に入ってからの感染拡大に現れています。現在の緊急事態宣言も、最初の宣言に比べて国民の雰囲気は違うと思います。そんな中で、私自身も、よく考えて行動していかなければならないと強く感じました。また、ワクチンの接種は、日本ではついこの間始まったばかりで、世界的に見ても大きな後れを取っていることがわかりました。よくアフターコロナという言葉を目にするようになりました。感染が一刻も早く落ち着くことを望みつつ、三木先生が言っていたように、元の日々に戻るのではなく、何を学ぶのか、どう変えていくのかということこれから考えていきたいです。（2）
7. 世界全体と日本を比べた時に、コロナウイルスに感染して死亡する確率はアメリカとほぼ同じという事実衝撃を受けた。トルコを発表したグループも言っていたが、高齢者人口が多いほど死亡率は高くなり、人口構成が死亡率に大きく関係してくるということが今回の授業で理解することができた。また、ワクチン生産量が高くても接種が進んでいない国も見られ、国民の理解を得られるような十分な情報を与えていくことが重要であると感じた。アメリカやイギリスでは接種が進み、新規感染者も減少傾向にある。この2カ国がモデルケースとして世界全体に示されていけば、世界的に接種が進むと考える。日本は緊急事態宣言が出ていたりまん延防止等重点措置が出ていたりするが、いまいち国民の動きを制限しきれていないという印象を持っている。また、オリンピックが開催されるのであれば、あと2ヶ月後にはさらに国民の動きが活発化するだろう。ワクチン接種率が世界的に見てもかなり低い状態でオリンピックを開催してしまっても良いのかと疑問に思っている。IOCは緊急事態宣言が出ていても開催するという趣旨の内容を発表している。あと2ヶ月でワクチン接種率が爆発的に上昇すると考えるのは無理があり、仮にオリンピックまでに新規感染者を減少傾向に持っていったとしてもオリンピックの影響で下げ止まりになり、第5波が来てしまうということが容易に想像できてしまう。正直今は経済よりも国民の安全が最重要ではないのだろうか、もっと国民に寄り添って意見を共有しあって判断すべきなのではないかと考える。（2）
8. 日本以外の様々な国の現状を見てきたが、やはり感染防止に向けて気を休めることはできないと感じた。東京新規感染者〇〇〇人とニュースで聞かされた時に、3桁だろうと4桁だろうと多いという印象を持つ。世界の国には日本の何倍もの感染者を有する国があることを読み取った。だからといって日本が安心安全かというところではないということを強くこの授業で感じた。感染者世界1位のアメリカはワクチン接種が行き届いている点や、死亡率あたりで比べた場合に次はブラジルが1位になる点など、単に国の大小をものさしとして使うことはできないということだ。ワクチンの普及が今後どうなるかわからないまま、オリンピックを迎えることにとても不安を感じる。もしかしら日本が感染大国の一員となることも想像ができる。授業で配られた各国感染者推移のグラフが今後縦に伸びすぎないことを願うばかりである。授業の終盤にもあったとおり、コロナウイルスが蔓延している事実是最悪であるが、その瞬間に立ち会っていることは、とても貴重であると感じる。（2）

(manabaアンケートの回答より抽出)

表13 2021年度「人文地理学」読書レポート（カミュ『ペスト』）

<p>1.</p>	<p>「愚者は経験に学び、賢者は歴史に学ぶ」という言葉をここに挙げたい。ペストは過去の病気であるが、新型インフルエンザの大流行やSARS、MERSなど私達は近年様々な感染症の流行を経験してきた。特に2009年の新型インフルエンザ流行下では、コロナウイルスの流行下でも起こったようにマスクの買い占めが相次ぎ、マスク不足に陥った。また、このレポートで並べてきたペストとコロナ禍の比較を鑑みても、似たような過ちを犯していることや、医療従事者への協力の姿勢等、ペスト流行下での成功をコロナ禍では活かすことができなかったという例があることが分かる。この状況を見ると、今の私達は「愚者」と言えるだろう。もちろん、オラン市におけるペストの流行と日本におけるコロナウイルスの流行はかなり状況が異なる。オラン市のペスト対策を全て参考にするというのは、規模や医療のレベル、そもそも感染症の種類や性質自体がかなり異なるため、無理があるだろう。ただ、こうした「記録」から、私は今までとはまた異なる角度から新型コロナウイルス感染症を見つめ直すことができたとと思う。コロナ禍に起こった様々な出来事が歴史的事実として後世に伝わり、次こそは「賢者」としてこの記録を活かすことができるとよいと思う。（2）</p>
<p>2.</p>	<p>もし本当にコロナウイルスが収束した時には、人々はコロナウイルスを忘れないでいられるのだろうか。もし何もしなければ時間が経つにつれ忘れられてしまうだろう。だからこそ、コロナ禍を実際に体験した私たちは、コロナの記憶を後世の人々に伝えていく義務があると考えている。二度と同じことを繰り返さないためにも、コロナの記憶を風化させてはいけない。ここでの教訓を未来の世代につなげていく必要がある。この本は、コロナが始まるずっと前から、私たちに教訓を示し続けてくれた。次は私たちの番だ。感染症の恐怖を未来の世代に伝えていくためにも、今のコロナ禍の時代を一生懸命生きていきたいと思う。（2）</p>
<p>3.</p>	<p>現在の状況を『ペスト』で位置づけるとするとしたら、ロックダウン解除の部分に対応するのだと考える。オリンピックが1ヶ月後に控え、イベントも徐々に解禁されており、さらに人々の動きによって活気づくであろう。また、ワクチン接種率の上昇によって行動範囲も広がると考える。このまま終息することが1番であるが、現実そう甘くはないと思う。また、仮に終息したとしても歴史は繰り返し、忘れた頃にやってくる。この経験を生かして生活し思考を巡らせなければ、1年半近く苦しんでいるこの状況は全て無駄になってしまう。感染症は身構えていて来るものではなく、自然発生的に突然出現するものである。不測の事態に対応できる力を持つために、この状況を風化させることなく伝承していくことが求められていると考える。私は新型コロナウイルス感染症の時代を生きた1人として、学校教育において新型コロナウイルス感染症をただの過去の出来事として捉えさせるのではなく、このような状況になったときに個人がどのような行動を取ったら良いのか、正しい情報を見分けるにはどうすべきかを教科横断的な学習を通して考え、対応できる人材を育てたいと強く思った。（2）</p>
<p>4.</p>	<p>時代が変遷し、様々な事柄が発展してきたが、全ての発展を素直に喜ぶ事は出来ないと感じた。発展があったからこそ、発生した問題も存在している。まだ、新型コロナウイルス感染症に打ち勝ったわけではない。そこは誤解してはならない。自己中心的に生きる事も一つの生き方なのかもしれないが、自分自身の安易な行動が、他人の人生を破壊する事を肝に銘じながら、感染終息に向けて、生活して参りたい。（2）</p>
<p>5.</p>	<p>『ペスト』には医師リウーの「ペストと戦う唯一の方法は、誠実さということだ」という言葉がある。人間は観念ではない、ヒロイズムという問題でない、と考える彼のこの「誠実さ」という言葉は、現在にも通じるものがあると考えている。つまり、コロナと戦う唯一の方法は誠実さということである。長く続くコロナやその対策のせいで、この「誠実さ」が人々の中に失われつつある。終息には政府の対策が欠かせないが、人々の「誠実さ」も必要不可欠である。現在のコロナの状況を踏まえ、人々は今までの自分の行動を振り返り、「誠実さ」を考えるべきである。（2）</p>
<p>6.</p>	<p>私たちは、コロナ禍において、どれだけ当事者意識をもって行動しているだろうか。自分の健康が害されるものとして感染症の蔓延を危惧しているだろうか。自由に遊びたい、しかし政府が言っているから制限に従おう、感染者が増えてしまうから家にいよう、〇〇という国は感染者数が増えて大変そうだな、とどこか他人事として考えていないだろうか。政府が国民に訴えかける内容やその理由を適切に理解しているだろうか。もちろん、政府の言うことに従ったり、報道を見て現状に不安を抱いたりすることは間違ったことではないが、「社会の一員である」自分として当事者意識をもって物事を捉えることが大切なのではないだろうか。私は、恥ずかしながら自分が濃厚接触者になってはじめて、自分の身に危険が及ぶ可能性があることを自覚し、政府が制限するからという理由ではなく、自分の身を守るためという理由で行動に制限をかけるということができるようになった。必ずしも皆が危険にさらされないと当事者意識をもつことができないうわけではないが、自分自身の身を守るため、選択を誤らないためと、社会の一員としての正しい姿勢でいられるようにすることを目指す必要があるのではないかと考えた。（2）</p>

（読書レポートより抜粋）

表14 2021年度「地理学」事後アンケート（「病気の歴史と今」）

1.	今日の授業で、世界の歴史的な面で感染症がいかに大きな影響を与えていたのか知ることが出来ました。大航海時代や植民地の開拓などでは、いつも貿易や文化の伝来ばかりイメージしてしまいがちでしたが、それらは新たな病気を生み出し、人流を作り、感染症を横行させるものであると改めて考えさせられました。感染症はどの時代も脅威であり、そして何度も繰り返されたその感染症に対してたくさんの人間が尽力して今に至っているのだと思います。現在コロナが流行する中で、こういった講義を受けられたことは、より実感を持ちながら歴史的つながりなどを見いだせる良い機会になりました。コロナもあくまで歴史上のひとつの出来事に過ぎず、これから必ず解決する日は来ると思うと少し不安が無くなりました。「ある国の文明度を測る唯一の基準は、弱者に対して国がどういう態度をとるかだ。」という言葉には感銘を受けました。今の環境下で、日本がいかに立ち回り、進んでいくのか。他人事ではなく自分事として受け止め、考え続けていきたいです。（1）
2.	14世紀ごろには、世界〔正しくはヨーロッパ〕の人口が3分の2に減少するペスト感染症が起きており、ペストの死者数と現在のコロナウイルスの死者数を比較すると現在の感染症治療がいかに進化しているかを実感することが出来た。また、異なる文化圏の交流が活発化したことにより感染症が増加した歴史を知り、異なる文化圏との交流には長所と短所が存在したことを知ることが出来た。さらに、未知のウイルスと対峙した際の人間の弱さも感じる事が出来た。（1）
3.	今回の授業を通して、私が考えていた以上の人々がこれまでに感染症で亡くなっていることを知った。私達が今こうして生きていられるのは昔の人々が病気を研究し、薬やワクチンを開発してくれたおかげなのだと思った。また、ウイルスの感染経路に地理が深く関わってくることも改めて学べた。今はしっかり感染対策をしようと思う。（1）
4.	自分が生まれてからの出来事ではありますが、MARSやSARSは記憶にないため、自分の中ではこのような大きな感染症の拡大を体験するのはコロナウイルスが初めてです。生活に制限がかけられてからもう1年以上たち、振り返ってみると初めは主にアジアでしか流行っていなかったのがいつの間にかアメリカやヨーロッパに拡大していたことを思い出しました。このような状態になり、どれだけ日本と外国で人の出入りが行われているかが分かりました。感染者数のプリントを見ても、今はヨーロッパのほうが事態が深刻のように考えられました。今回の特別回で、大変身近な話題について学ぶことができ、とても楽しく興味深かったです。ありがとうございました。（1）
5.	今回の授業はペストや新型コロナウイルスなどの感染症の歴史について学んだ。ペストは過去に一度ヨーロッパで流行したものであると思っていたが、モンゴル帝国からヨーロッパだけでなくアジアやアフリカなど広範囲にわたって広がっていたことが分かった。陸上や海上のつながりが増えたことが、感染症が広がるスピードが上がってしまった原因であった。現代はペストの時代よりもさらにグローバル化が進み、行こうと思えばすぐに海外に行くことが可能である。このことが今回世界で感染が広がる原因の一つなのではないかと思った。また、コロナウイルス感染者の母数が合わない問題は国の制度とも関連している可能性があることが分かった。（1）
6.	同じ感染症でも人種や地域によって症状が重篤化したり軽かったりすることが、自分たちの地域文化への疑いや自責の念につながり、それによって昔の特定地域の文化の消滅や減少につながったということが印象に残りました。正しい医療知識は文化の保護にもつながることが分かりました。（1）
7.	船や陸でしか国を行き来できなかったころでさえ、梅毒が20年という早さで伝染していったことを考えると、昔よりも他国への移動が頻繁になった現代において、コロナウイルスが数か月という早さで世界で広まっていったことも納得ができた。感染症が戦争にも影響を与えていたことは初めて知ったので非常に興味深かった。戦闘能力が最も戦争の勝敗を分ける原因だと考えていたが、そのときに流行していた感染症への免疫があるかないかの違いでも勝敗が決まっていたのではないかと思った。コロナウイルスの拡大について、日本でも感染者数の増加が大きな問題となっているが、ヨーロッパの国に比べると感染者数が少なく感じた。東京オリンピックを開催するにあたって、「日本はほかの国に比べて感染者数をコントロールできている」というようなことをオリンピックの会長が言ったと聞いたが、たしかにこの感染者数の違いを見ると、そう思うこともうなずけると思った。しかし、ワクチンの接種率については、日本とヨーロッパの国々には大きな差がある。この差にはどのような原因があるのか気になった。（2）
8.	今まで過去の疫病について学ぶ機会がほとんどなかったため、現在の新型コロナと比較して考えられて興味深かった。ペストのスケープゴートのように、疫病が発生した地域や感染した人への差別は昔からあったんだと気がついた。感染者数の推移をみて、ヨーロッパの感染者数の多さに改めて驚いたし、先生もおっしゃっていたが、新型コロナに関する年表の日本での出来事が、書き並べてみると本当にオリンピック基準で起こっていて、振り回されているなと感じた。（2）
9.	COVID-19を含め、感染症の蔓延は、人の移動と密接に関わっていると思った。授業で配られた新聞記事に、日本と欧米のコロナウイルスに対する処置の方法が違うということが書かれていたが、これは当然のことだろうと私は考えた。日本のように、自粛要請を出してある程度の人がそれに従うという国もあれば、自粛要請では弱く、ロックダウンといった強力な規制をしないと、人々が従わない国もあるので、そのように考えた。また、同じ記事で日本のコロナに対する「自粛型」の対策は市民の良識に頼るということであるが、私たちのコロナに対する政府の対応への反応の姿勢を見ると、日本国民にそのような良識があるとは思えないという意見を佐伯氏が述べていて、私は同感だった。私たちは、政府に文句を言いつつも、コロナウイルスが感染し始めた頃に比べて、コロナの脅威を感じなくなっていて、感染対策を徹底しなくなっているといえる。やはり、再度コロナウイルスに関する正しい知識をいれ、それに基づいて基本的なところから感染対策を見直すべきだと痛感した。また、コロナの感染が広がったのは「中国の責任だ」と中国に責任を預けるのではなく、広がってしまったことは仕方のないことだから、1国を責めるのではなく、私たちにも悪いところがあったのではないかと疑い、さらに感染が広まらないように、国と国が協力して動くというのが求められると考える。（3）
10.	伝染病は過去にも大きく歴史を動かしていることが授業を受けてわかり、今その歴史の転換点にいるのかなと感じました。最後の人間と環境の関係を再考する機会にというのはコロナが始まってから自分も思っていたところなので、今後社会がどのような変化、進化をするのか気になりました。（2）

(manabaアンケートの回答より抽出)

受講生には、あらかじめ前週のmanabaアンケートで「ヨーロッパのコロナについて知っていること」を書いた上で本授業に臨んでもらった。そこでは、感染者数の多さやロックダウンの徹底ぶり、ワクチン接種の進行、折からのイギリスでのサッカー観戦のニュース（表1の7月11日の項参照）などをあげた者が多かった。表14は、本授業の事後アンケート（提出者32名）から抽出したもので、14-1~3では歴史的な見通しを得ることの重要性が改めて認識されている。14-4にある「とても楽しく」という言葉も、「学ぶこと」の楽しさを物語っているのであろう。また、今日のグローバル化の影響や統計の問題⁴⁶⁾（14-5）、感染症が戦争に与えた影響（14-6⁴⁷⁾・7）、五輪との関連（14-7・8）にふれた回答があったほか、紹介した新聞記事や著書に触発された受講生もいた（14-9・10）。本授業は共通教養科目ゆえに、さまざまな分野を専攻する学生たちに地理学や歴史地理学の魅力を分かりやすく伝えることを筆者の意図としているが、新型コロナという身近な題材を扱うことによって、序章で述べたような俯瞰する視点の大切さがより伝わったものと思われる。

V. 結びにかえて

新型コロナへの対応を考える場合、何よりもまず医学的見地からの対策や処置が必要なことは論をまたない。しかしながら、社会的⁴⁸⁾、あるいは精神的⁴⁹⁾な生き物である人間にとっては、コロナ禍（コロナ下）の長期化にともなって発生する社会状況をどのように認識し、その動きにどう対応していくのかもまた重要である。とはいえ、新型コロナの感染は現在進行中の事態であり、無数ともいえる情報が錯綜する中、状況の冷静な把握は容易なことではない。この点、表1のように時系列できごとを並べたり、表2・3のような形で国別・都道府県別の感染状況を見渡したりすることは、現状の時間的・空間的な立ち位置を自分なりに考察する上で一つの大きな武器となり得よう。さら

には、時間軸を長くにとって感染症の歴史を振り返ることができれば、より客観的な目で現状を見直す一助にもなる。ふたたびジョルダナーノの言を借りれば、「今起きていることは偶発事故でもなければ、単なる災い」でもなく、「それにこれは少しも新しいことじゃない。過去にもあったし、これからも起きるだろうことなのだ」⁵⁰⁾。

感染者数・死者数の集計、あるいはロックダウンや緊急事態宣言等の発令が国や都道府県・市町村単位でなされる今回の新型コロナは、はからずも行政区域やその境界の存在を人々に再認識させる機会となっている。そして、新型コロナの感染やこれへの対応、もしくはそれらによって招来される社会的状況の空間的分布および差異は、一年半以上にわたり現代世界の諸側面をあからさまに映し出してきた。こうしたことを地理学的に分析・考察することは、「すべての科学の統一は、地理においてみいだされる」（デューイ『学校と社会』⁵¹⁾）との言辞にもかなう重要な視点といえる⁵²⁾。本稿では大学の授業における新型コロナの地理的把握の例を取り上げたが、小・中・高などそれぞれの段階に応じてこれに類する試みを行なうことは、児童・生徒にコロナ禍の現在を生きる力を与えることにもなる。新型コロナに「いかに」対応するのかを考える上でも、まずはそれが「何」であって「いつ」・「どこに」存在しているのかを問わねばならない。

新型コロナは、約1世紀前のスペイン風邪⁵³⁾以来のパンデミック（世界的流行）となり、現代世界を生きるほとんどの人々にとって未曾有の事態をもたらした。平時であれば人生の中で行動が最高度に活発になるといっても良い時期に、たまさかコロナ禍に遭遇して大きな制約をうける現在の大学生たちは、本稿でみてきたように、教える側の世代以上にその現状や世相を敏感にとらえている⁵⁴⁾。そこにはさまざまな不満が存在することも想定され⁵⁵⁾、教職員はいつも以上にそうした学生の声を丁寧にすくいとっていく必要があるだろう。そして、学生たちの文章にもあるように、や

がて来たるべきコロナ後、ないし「withコロナ」の時代に向かう前提として、現下のコロナ禍で起こっていることや感じていることをしっかりと記憶にとどめておくことは、単なる「元通り」にならないためにも、不可欠の作業である。

『武漢日記』に以下のような一節がある。「私たちの頭脳は教師の教えによって育つのではない、新聞記事によって育つわけでも、会議の書類によって育つわけでもない。自分の力によって育つのだ。頭脳は独立思考して初めて価値あるものとなる」⁵⁶⁾。学問の場で最重要なものの一つが「独立思考」だとすれば、今回の新型コロナは、教科書のない「独立思考」の必要性を、私たち一人一人に突きつけている。

付記

困難な状況のもとで筆者の授業に参加し、さまざまな意見や感想を寄せてくれた受講生たちに感謝したい。筆者自身の中にもさまざまな思いが去来する日々にあって、自らの新型コロナに対する見方を整理しつつ本稿をなすに至ったのは、ひとえに彼らのおかげである。

注

- 1) 例えば地理学では、『地理』(古今書院)2021年3月号が特集「オンライン講義・授業・学会の工夫と課題」(66-3, pp.4-50)を組んでおり、日本地理教育学会も「地理教育におけるオンライン学習」をテーマとする例会を2021年3月に開いている(『新地理』69-2, pp.82-96)。
- 2) ①ウィリアム＝H＝マクニール著、佐々木昭夫訳(2007):『疾病と世界史 上・下』, 中公文庫。②ジャレド＝ダイヤモンド著、倉骨彰訳(2000):『銃・病原菌・鉄－1万3000年にわたる人類史の謎－上・下』, 草思社。
- 3) 菊池万雄(1978):「江戸時代におけるコレラ病の流行－寺院過去帳による実証－」, 人文地理30-5, pp.63-77。小林茂(2000):「近世の南西諸島における天然痘の流行パターンと人痘

法の施行」, 歴史地理学42-1, pp.47-63。川口洋(2001):「牛痘種痘法導入期の武蔵国多摩郡における疱瘡による疾病災害」, 歴史地理学43-1, pp.47-64。渡辺理絵(2010):「近世農村社会における天然痘の伝播過程－出羽国中津川郷を事例として－」, 地理学評論83-3, pp.248-269。

- 4) 仲松彌秀(1942):「琉球列島に於けるマラリア病の地理学的研究」, 地理学評論18-4, pp.49-73。千葉徳爾(1972):「八重山諸島におけるマラリアと住民」, 地理学評論45-7, pp.461-474。高橋品子(2009):「近代八重山のマラリアと集落存続」, 地理学評論82-5, pp.442-464。
- 5) 中谷友樹(2021):「COVID-19流行と災害の地理学」, 科学91-5, pp.468-473。同上(2021):「感染症の災害地理学」, 地理66-9, pp.47-53。
- 6) 基本的に学生の記述をそのまま引用したが、誤字等は適宜改めた。なお、学生の記述をそのまま引用する場合は「抽出」、一部を引用する場合は「抜粋」とした。
- 7) 黒木登志夫(2020):『新型コロナの科学－パンデミック、そして共生の未来へ－』, 中公新書, pp.102-104。
- 8) 方方著、飯塚容・渡辺新一訳(2020):『武漢日記－封鎖下60日の魂の記録－』, 河出書房新社, p.8。
- 9) 世界の感染者数については、表2に示したWHOホームページのデータによる。
- 10) パオロ＝ジョルダノ著、飯田亮介訳(2020):『コロナの時代の僕ら』, 早川書房, p.8。
- 11) 前掲7), pp.190-199。逆に、ニュージーランドのアーダーン首相、台湾の蔡英文総統、ドイツのメルケル首相といった女性政治家は、優れた対応を評価されている(後掲6-7がこれにふれている)。
- 12) 浦島充佳(2021):『新型コロナ データで迫るその姿－エビデンスに基づき理解する－』, DOJIN選書, pp.49-73・pp.161-167。国民の所得水準が高い国ほど都市化率が高いことも死亡率を上げる要因とされる。

- 13) 世界・日本（後掲表3）いずれのデータにおいても、感染者数のピークの後しばらくしてから死者数のピークを迎えることが読みとれる。
- 14) 前掲7), pp.159-186. 他方, PCR検査数の少なさとそれに関わる厚生労働省の姿勢, 突然の一斉休校要請などはコロナ対応の悪例としてあげられている。
- 15) 前掲7), p.163は, 2020年6月24日の専門家会議から分科会への「降格」(表1参照)を問題視している。問題を矮小化・限定化しようとする行政の姿勢は, 2021年の「まん延防止等重点措置」制度の導入などにもよくあらわれている。
- 16) 前掲10), p.28は, 感染症の流行に際しては, 「最善を望むことが必ずしも正しい希望の持ち方とは限らない」と記している。日本にとどまらず, 新型コロナに関し楽観論に傾きすぎる政治指導者はかえって事態の悪化をまねいている。なお鷺田清一による「折々のことば」(朝日新聞2021年8月26日付)がこの言葉を取り上げている。
- 17) 北海道では第3波前期と第4波後期, 大阪・兵庫では第4波前期に死者数が顕著に増えた。
- 18) カミュ著, 宮崎嶺雄訳(1969):『ペスト』, 新潮文庫, 382p.
- 19) 浜島書店編集部編(2000):『新詳世界史図説』, 浜島書店, p.139. 木村靖二ほか監修(2014):『詳説世界史図録』, 山川出版社, pp.198-199.
- 20) 「(新型コロナ) スペイン風邪に学ぶことは20世紀最悪のパンデミック」(朝日新聞2020年4月24日付)の記事も紹介した。
- 21) ダニエル=デフォー著, 平井正穂訳(1973):『ペスト』, 中公文庫, 453p. 本授業では, pp.54-63をとくに取り上げた。なお本書は, 武田将明(2020):『NHKテキスト 100分de名著デフォー『ペストの記憶』』, NHK出版, 109p. で取り上げられた。カミュ『ペスト』(前掲18), p.4)のエピグラフ(題辞)には, デフォーの「ある種の監禁状態を他のある種のそれによって表現することは, 何であれ実際に存在するあるものを, 存在しないものによって表現することと同じくらいに, 理にかなったことである」という言葉がおかれている。
- 22) オランは地中海性気候(Cs)地域に属し, カミュも「夏の間は, 太陽が乾燥しすぎた家々を燃え上がらばかりに熱し, 鼠色の灰で壁をおおう。そうなる, もう錠扉^{よろいど}を閉めきった薄暗がりのなかでしか暮せない」などとその気候を描写している。前掲18), p.5.
- 23) 加藤博・島田周平編(2012):『世界地名大事典3 中東・アフリカ』, 朝倉書店, p.211, にあるオランの項(飯山陽による)を参照した。なお, 同項にオランが「ベルベル(アマジグ)民謡と現代音楽を融合させたライの発祥地でもある」とあったことから, 授業中にライ音楽を参考のために流した。
- 24) 宮田光雄(2014):『われ反抗す, ゆえにわれら在りーカミュ『ペスト』を読むー』, 岩波ブックレット, 71p. 中条省平(2018):『NHKテキスト 100分de名著 アルベール・カミュ『ペスト』』, NHK出版, 107p.
- 25) 「(時代の栞)「ペスト」1950年刊 カミュ疫病と誠実に闘う人々」(朝日新聞2021年7月15日付夕刊)。
- 26) 資料末尾に以下のような筆者の感想を記した。「みなさんの文章を読んだの印象は, 若い人がもつしなやかさです。オンライン授業に追われていた今年度の私が, 逆に励まされたような気分になりました。収束までにはまだまだ時間がかかりそうですが, この「歴史的体験」を今後に活かすべく, とともに歩みましょう。ありがとうございます。」
- 27) 「(インタビュー) 感染症と生きるには 新型コロナ 長崎大熱帯医学研究所教授・山本太郎さん」(朝日新聞2021年1月15日付)。なお, 山本は後掲43)③の著者である。
- 28) 難波中学校は大阪ミナミの繁華街近くに位置

- し、外国をルーツとするなど多様な背景をもつ生徒が多いという。
- 29) 前掲7), p.77・133・171・175.
- 30) 「在宅授業, そろわぬ足並み ネット不調, 参加できず・端末慣れず対面」(朝日新聞2021年4月27日付). 「「自主休校」学びの保障に差感染不安, やっとオンライン授業」(同5月2日付).
- 31) 教育実習中の4年生には別テーマで記入してもらったので, この合計からは除いた.
- 32) ただし, 授業では週ごとのデータを示した. これは後述の表2についても同様である.
- 33) 前掲7), p.61・154・171・189・294. 前掲12), p.121・139・146・148・237・245.
- 34) 「(いま子どもたちは) コロナ下の自習室: 1家より集中, 「先生」は大学生」(朝日新聞2021年6月20日付).
- 35) 「ウイルスとの共生, 社会経済との両立, 集団免疫の獲得という大きな物語」と, 「たとえば『祖母が感染して亡くなった』』といった「個別の物語」との「2つの物語」が進行しているとある前掲27) の記事を添付した上で, 「今回は「大きな物語」に注目したわけですが, 「小さな物語」を忘れないこと, あるいは「小さな物語」の積み重ねが「大きな物語」であることに注意することも重要だと思います」と記した.
- 36) 12-5・7に日本とアメリカの致死率がほぼ同じという記述がある. 授業時(2021年5月23日現在)には日本が0.017, アメリカが0.018であった. また12-7・8にあるワクチン接種率(同)は, アメリカ79.9%, イギリス84.0%に対し, 日本は4.4%であった.
- 37) 「インドから帰国禁止, 豪州波紋 違反に禁錮刑も, 水際対策「差別だ」」(朝日新聞2021年5月5日付). 「コロナ追悼, 分け隔てなく市民も実名, 感染者差別せぬ国民意識イタリア紙」(同2020年5月21日付). 本文で取り上げたのは後者の記事である.
- 38) 前掲7), pp.60-61. 新型コロナ感染を本人の責任と考える人の割合は, 日本の11.5%に対し, 中国4.8%, イタリア2.5%, イギリス1.5%, アメリカ1.0%である.
- 39) 前掲8), p.141 (後掲14-1もこれにふれている). この部分に先行する文章をここに掲げておく. 「私は言っておきたい. ある国の文明度を測る基準は, どれほど高いビルがあるか, どれほど速い車があるかではない. どれほど強力な武器があるか, どれほど勇ましい軍隊があるかでもない. どれほど科学技術が発達しているか, どれほど芸術が素晴らしいかでもない. ましてや, どれほど豪華な会議を開き, どれほど絢爛たる花火を上げるかでもなければ, どれほど多くの人々が世界各地を豪遊して爆買いするかでもない」.
- 40) 「すべてが終わった時, 本当に僕たちは以前とまったく同じ世界を再現したいのだろうか」と問いを立てた上で, 「もしも, 僕たちがあえて今から, 元に戻ってほしくないことについて考えない限りは, そうなってしまうはずだ. まずはめいめいが自分のために, そしていつかは一緒に考えてみよう. 僕には, どうしたらこの非人道的な資本主義をもう少し人間に優しいシステムにできるのかも, 経済システムがどうすれば変化するのかも, 人間が環境とのつきあい方をどう変えるべきなのかもわからない. 実のところ, 自分の行動を変える自信すらない. でも, これだけは断言できる. まずは進んで考えてみなければ, そうした物事はひとつとして実現できない」と述べている. 前掲10), p.109・115.
- 41) しりあがり寿「地球防衛家のヒトビト」(朝日新聞2021年5月18日付夕刊). 「あー早くワクチンがいきわたって元の日々に戻りたいなー」と「カーサン」がつぶやきながらテレビを見ると, 「いち早くワクチン接種が進んだイスラエルですが…パレスチナとの間に激しい戦闘が…」とのニュースで, カーサンは「元

- の日々……。なお、しりあがり寿 (2021) : 『くる日もくる日もコロナのマンガ』, ビームコミックス, 240p, は, 上記「地球防衛家のヒトビト」(2020年分)を中心にコロナ禍の世相を巧みに切り取った作品で構成されている。
- 42) この「大学2年生」問題は, 以下の記事に取り上げられるような社会的課題でもある。「コロナ下, つらさ際立つ大学2年生」(朝日新聞2021年8月11日付)。「(社説)大学2年生 対策急ぎ「危機」回避を」(同8月18日付)。
- 43) ①村上陽一郎 (1983) : 『ペスト大流行-ヨーロッパ中世の崩壊-』, 岩波新書, 192p. ②濱田篤郎 (2002) : 『旅と病の三千年史-旅行医学から見た世界地図-』, 文春新書, 212p. ③山本太郎 (2011) : 『感染症と文明-共生への道-』, 岩波新書, 205p.
- 44) 日本・アメリカと, 感染者数上位のイギリス・ロシア・トルコ・フランス・スペイン, それにヨーロッパで感染者数が比較的多いイタリア (12)・ドイツ (13)・ポーランド (16)・ウクライナ (19)・チェコ (25)・スウェーデン (34) を取り上げた (括弧内は感染者数の順位。本表の掲載は割愛)。
- 45) 「(異論のススメ スペシャル) 対コロナ戦争 佐伯啓思」(朝日新聞2021年6月26日付)。本記事は, 「強力措置講じる欧米 国家の安全確保第一 市民も共同防衛関与」, 「良識頼りの「自粛型」いずれ岐路に」との副題通り, 欧米と日本を対比させている。筆者は, 「どちらがよいというのではない。欧米がうまくいっているというわけでもない。ただ, 何が違うのかが気にはなる」としてその相違を述べた上で, 日本について「「自粛型」とは市民の良識に頼ることであるが, 果たしてそれだけの良識がわれわれにあるのだろうか。どうせ国が何とかしてくれると高をくくりつつ, ただ政府の煮え切らなさを批判するという姿勢に良識があるとは思えないのである」と結んでいる。
- 46) 筆者は表2・3のようなデータを適宜更新しているが, とりわけスペインは1年以上前に遡って週ごとの感染者数を頻繁に上下させている。その一因として, あくまで推測ではあるが, 同国の地方分権的な制度が想定されることを話した。
- 47) 大航海時代にラテンアメリカ各地を襲った感染症は, ヨーロッパ人の軍事行動以上にインディオに惨禍をもたらし, 自文化の価値を根本から疑わせる事態につながった。前掲2) ①下巻, pp.81-105.
- 48) アリストテレス著, 山本光雄訳 (1961) : 『政治学』, 岩波文庫, p.20には, 「人間は自然に国的動物である」とあり, この「国的」の部分が「ポリス的」・「社会的」などと訳(ないし意識)されてきた。
- 49) 泉谷閑示 (2021) : 『「うつ」の効用-生まれ直しの哲学-』, 幻冬舎新書, p.7には, このパンデミックにふれた以下のような一文がある。「未曾有の災禍を経験した私たちですが, 私たち人間が, 本質的に精神というものによって決定される存在である以上, 即物的な問題の解決だけで救われるものではありません」。
- 50) 前掲10), p.10.
- 51) 「地理の意義は, 地球を人間の諸々の仕事の永続的な場として提示することにある。人間の活動と関係をもたない世界は, 世界とよぶに足りないものである。人間の努力とその達成は, 地球におろしたその根から切り離してみるならば, 一片の感情にすら足りず, 何の名にも値いしない」と続く。デューイ著, 宮原誠一訳 (1957) : 『学校と社会』, 岩波文庫, p.32.
- 52) 今回の新型コロナウイルスはコウモリ由来の人獣共通感染症であり, 人間が身勝手に自らの生活領域を広げて動物との棲み分けが崩れたことが感染のきっかけとなったという(前掲7), pp.292-293)。そういう意味で新型コロナは, 地理学の基本主題の一つである人間と自然環境の関わりを再考する糸口にもなろう(前掲40)のほか, 14-10にもそのような記述がある)。

- 53) 矢野恒太記念会編・発行(2020):『データでみる県勢 2021年版』, p.66は, 1918~21年のスペイン風邪による都道府県別死者数の表とその解説を載せている。このとき死者数が多かったのは, 東京・兵庫・大阪・福岡・埼玉の順であった。ちなみに2021年度春学期「人文地理学」の期末試験では, 論説問題の題材として本表を用いた。
- 54) 本稿で引用したmanabaアンケートでは字数の規定を設けていない。それにも関わらず, 表のごとく充実した記述が多いのは, 第IV章(2)でふれた読書レポートと同様, 新型コロナが彼らに与えている影響の大きさを端的に示している。
- 55) 前掲7), pp.290-291は以下のように述べている。「大学教育は, 知識だけではない。友人と学問について議論をし, 将来への夢を語る場を提供するのも, 大学の重要な役割である。小中高生の授業が再開され, Go Toトラベルによってみんな動き出したのに, 大学生だけを閉じ込めておくのは, 彼ら/彼女らにとっても納得できないであろう」。私見によれば, 大学における制約がとくに厳しい一因として, 大学を単なる卒業(とそれにとまなう資格)取得の場ととらえがちな日本特有の認識の存在があると思われる。
- 56) 前掲8), pp.158-159.